

学習院が所蔵する華族会館旧蔵洋書について

—忘れられた華族会館寄贈図書 その2—

広瀬 淳子

論文要旨

本稿は学習院大学に埋もれていた華族会館旧蔵洋書についての調査報告である。

明治2年の布達により新たに華族と称されるようになった旧諸侯（大名）と公卿（公家）たちによって明治7年に設立された華族会館は、明治10年に学習院を創立した際、図書館を作る目的で収集していた資料のほとんど即ち和漢書9,159冊及び洋書1,614冊を学習院へ寄贈した。

その事実を裏付ける『華族会館寄贈図書目録』が学習院大学図書館書庫に眠っていた。

そのなかの洋書目録は日本語で記載されているため、表示された書名等を手掛かりに原書をすべて同定することは不可能であった。そこで、学習院が明治30年以前に受入れた洋書のなかで明治10年（1877年）までに出版されたものを選び出してその蔵書印等を調査した結果、836冊の華族会館旧蔵洋書を確認した。そうしてリストを作成すると、明治初期の新しい国造りに向けたコレクションが浮かび上がった。その多くは勝海舟をとおして徳川宗家から寄贈されたものである。

キーワード【華族会館、学習院図書館、勝海舟、徳川宗家、明六社】

目次

はじめに

1. 蔵書目録『明治十二年十月調査会館贈寄学習院英書目録』『明治十二年十月調査会館贈寄学習院仏独書目録』について—『華族会館寄贈図書目録』〈その2〉—
2. 華族会館旧蔵洋書の調査
3. 華族会館旧蔵洋書の概要
 - (1) コレクションの内容
 - (2) 旧蔵者・寄贈者
4. 徳川宗家が寄贈した洋書について—森有礼旧蔵書との関連性を探る—
終わりに

参考資料 学習院大学図書館備付（未公開）

- リスト1. 『明治十二年十月調査会館贈寄学習院英書目録』『明治十二年十月調査会館贈寄学習院仏独書目録』翻刻版（仮）
- リスト2. 華族会館旧蔵洋書目録（仮）
- リスト3. 華族会館旧蔵洋書目録—『華族会館寄贈図書目録』リンク版—（仮）

はじめに

学習院大学図書館書庫に「明治十二年十月『華族会館寄贈図書目録』学習院図書課」と表紙に記された和漢書と洋書の目録が保存されている。その記載内容をもとに「華族会館寄贈図書」に徳川宗家旧蔵書が含まれる事実を前稿において明らかにした¹⁾。引き続き華族会館旧蔵洋書に関する調査を行った。

最初に洋書目録『明治十二年十月調査会館贈寄〔ママ〕学習院英書目録』『明治十二年十月調査会館贈寄〔ママ〕学習院仏独書目録』の概要を調査し、目録に「ヒューム、スモレット合著『英国史』一部八冊」を皮切りに洋書418件1,689冊が記載されているのを確認した(リスト1参照)。なお、本稿においてはこの洋書目録の名称に『華族会館寄贈図書目録』を用いることとする。

続いて学習院が明治30年までに受入れた洋書のなかで、(華族会館から寄贈を受けた)明治10年(1877年)以前に出版されたものを選び出して照合調査を行い、蔵書印等を手掛かりに華族会館旧蔵洋書836冊を確認した(リスト2参照)。その上で図書に残された様々な書き込みと『華族会館誌』²⁾の記載内容その他を照合することで寄贈者をおおよそ特定した。

華族会館旧蔵洋書の大半は徳川宗家からの寄贈書であり、そのために勝海舟が瑞穂屋卯三郎から購入したものである(前稿参照)。海舟たちはどのような基準で寄贈する図書を選択したのだろうか。どうして明治8年に瑞穂屋は2カ月足らずで1,000冊の洋書を用意できたのだろうか。追及を続けて、瑞穂屋卯三郎が会計を担当していた明六社の社長森有礼がアメリカから持ち帰った蔵書の一部を海舟たちが購入した可能性が高いという結論に至った。そこで森有礼旧蔵書が中心を占めるといわれる東京書籍館(国立国会図書館の前身)の蔵書と華族会館旧蔵洋書を対比した調査を行った。

一連の調査をとおして、華族会館旧蔵洋書が将来の貴族院議員としての活動を想定して収集されたものであること、また、学習院に残された華族会館旧蔵書が、東京書籍館や、東京大学の前身である東京開成学校の蔵書と並んで、明治初期の日本に存在した先進的なコレクションであることを解明した。

なお、調査結果に基づいて作成した目録(リスト1・リスト2・リスト3)は当該書籍の所有者である学習院大学図書館に提出した。現在学習院大学図書館が保有している(未公開)。

1. 蔵書目録『明治十二年十月調査会館贈寄学習院英書目録』『明治十二年十月調査会館贈寄学習院仏独書目録』について

— 『華族会館寄贈図書目録』〈その2〉 —

日本語で記載された標記洋書目録は、華族会館旧蔵洋書を記録した目録として学習院で確認された唯一のものである（2011年6月20日現在）。目録に「探索中」と朱で書き込まれた箇所があるので、閲覧用としてではなく事務管理用として用いられたと考えられる（「リスト1」参照）。

目録には、『華族会館寄贈図書目録』に共に綴じられていた和漢書目録や『華族会館蔵書目録』（前稿参照）と同じ「会館書籍局」の罫紙が用いられている（図1参照）。罫紙の数は、英書が35枚、仏書が11枚、独逸書が10枚、計56枚。記載件数は英書が279件、仏書が74件、独逸書が65件、計418件である。

目録は「英書」と「仏独書」の2部から成り³⁾、それぞれ表紙、表題紙、目次、本文で構成されている。その記載内容は次のとおりである。

英書の表紙：「明治十二年十月調査会館贈寄〔ママ〕学習院英書目録 洋籍 第壹号 図書室」

仏独書表紙：「明治十二年十月調査会館贈寄〔ママ〕学習院仏独書目録 洋籍 第二号 図書室」

表題紙：

「二千五百三十九年 明治十二年十月調査会館贈寄〔ママ〕学習院図書室英書目録」

「紀元二千五百三十九年 明治十二年十月調査会館贈寄〔ママ〕学習院図書室仏書目録」

「紀元二千五百三十九年 明治十二年十月調査会館贈寄〔ママ〕学習院図書室独逸書目録」

目次：門別に内容が記されている。英書（全19門）仏書（全8門）独書（全8門）の門の分け方に共通性は見られない（各門の内容については表1参照）。

本文：門別に号、著者・書名等、部数、冊数が記載されている。以下に英書第1門のなかから1例を挙げてその記載内容を説明する（図1参照）。なお、本稿は以後見易さのために便宜的に「フロート『英国史』巻部十二冊」のように括弧を付して引用することとする。

自第十六号至第十八号 クートリッチ 希臘史 三部一冊

号：門毎に、図書1部（=1セット）につき1号が、重複図書には原則として連番で、割り振られている。（例外：英書第18門の会話本50部と50部にそれぞれ1番号が付与され

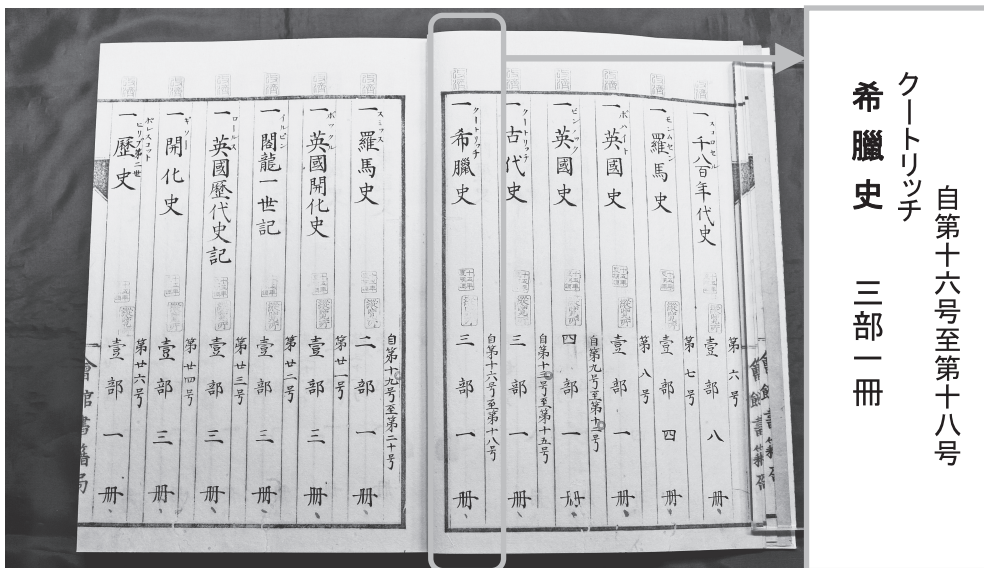


図1 クートリツチ『希臘史』記載ページ

(『華族会館寄贈図書目録』『洋籍第1号』第2葉)

- ・「会館書籍局」の罫紙が使用されている。
- ・書名の上に「改済」の朱印が押されている。
- ・書名の下に「十五年夏期調」と「縦覧所」の朱印が押されている。

ている。)号順に記載されているなかで部分的に順番等の乱れが見られる。即ち英書第1門(歴史)第2門(雑書)第8門(文法書)第18門(会話)等には欠番が存在する。第5門(法律書)第12門(地理書)等では番号が重複して付与されている。仏書第5門(地理書)第7門(文学書)第8門(海陸兵書)には号番が付与されずに「探索中」と朱書された箇所がある。英書第2門(雑書)等では号順が前後した箇所がある。

著者・書名等：概ね著者名は片仮名で、書名は日本語で表示されている。このように洋書を日本語によって表現する方法は当時国内で一般的に行われていたと考えられる⁴⁾。「著者」には著者の他に編者、改訂者、出版社、出版地等があげられている事例も見受けられる。「書名」はタイトルの直訳というよりは内容を表現したと考えられるものが多い。なかには『砂糖製造法』(英書第2門第58号)(=A treatise on the art of boiling sugar)のようなケースばかりではなく、『ホッパ― ウォルク 雑書』(英書第2門第104号)(=Thomas Hobbes, Works)(ホブズ著作集)のように、なかなか原書に結び付けることのできないものも存在する。『デモクラシーインアメリカ』『サイヤンスオフファイナンス』等、タイトルをそのままカタカナで表示したケースも見受けられる。先人達の苦心がしのばれるこの項目を、本稿においては「著者・書名等」と表現する。

部数：同一図書を何部所蔵しているかを表している。

冊数：英書においては1部（=1セット）が何冊からなるかを、仏書独書においては合計が何冊になるかを表している。例えば、英書第1門第2号「フロート『英国史』巻部十二冊」は1部全12冊の図書1セット（=計12冊）、英書第1門自第72号至73号「コールロスク『日耳曼史』二部一冊」（ゲルマン史）は1部全1冊の図書2セット（=計2冊）、英書第18門第91号「『英仏会話』五百部一冊」は1部全1冊の図書500セット（=計500冊）、仏書第1門自第6号至第20号「ワタリ氏『戦争記』十五部十五冊」は1部全1冊の図書を15セット（=計15冊）、独書第6門第3号「ギューテ氏『文集』巻部十八冊」（ゲーテ全集）は1部全18冊の図書を1セット（=計18冊）をそれぞれ表わしている。英書と仏書独書の表示方法の相違は実物等と照合した結果判明した。

号順に記載されたなかで英書第1門等にみられる欠番は、華族会館からの寄贈書のほかに学習院が独自に入手したものを合せて号番が付与されたために生じた可能性が大きい。

また、英書第2門「雑書」等の号順の乱れは、図書を一点一点照合して作成した目録に、後から確認した図書のデータを書き加えたために生じたものと考えられる⁵⁾。

標題にあるとおり、当該目録は明治12年10月の照合調査に基づいて作成されたものであって、明治10年に華族会館から学習院に寄贈された全タイトルを網羅しているとは限らないことに留意する必要がある。

目録に記載された件数（=概ねタイトル数）は計418件である。冊数については前述のとおり表記法が英書と仏書独書で異なっているため、実物や種々の書誌データをもとに同一の基準によって計算すると計1,689冊となる⁶⁾。門別の冊数、記載件数、部数（=セット数）の内訳は表1のとおりである。

集計にあたって「号」「部」が付与されず「探索中」と表示されている4例についてはそれぞれ件数は1件、部数は仮に1部とカウントし、「冊」も付与されていない1例については仮に0冊とする。その結果「表1」の件数は目録に記載されている実数である一方で、冊数（1箇所）と部数（4箇所）には仮の数字が含まれることになる。

目録にみるコレクションの特色

歴史書は（英書仏書独書合せて）85件（58+20+7）252冊（159+73+20）となり、全418タイトルの20%、全1,689冊の15%を占めている。英書第二門「雑書」には英国の思想家ホップス、ベーコン、スコットの著作集のほか、産業、工業、読本等の書籍が分類されている。タイトル数の多さと内容からみて、コレクションの重心は英書第1門「歴史」（全58タイトル）と第2門「雑書」（全57タイトル）にあるといえるであろう。そこにコレクターの意図が感じられる。

表1. 『華族会館寄贈図書目録』に記載された洋書 一門別の内容、冊数、件数、部数—

| 英仏独別 | 門 | 内容 | 冊数 | 件数 | 部数 |
|------|------|---------|-------|-----|-------|
| 英書 | 第一門 | 歴史 | 159 | 58 | 71 |
| 英書 | 第二門 | 雑書 | 155 | 57 | 102 |
| 英書 | 第三門 | 字書* | 52 | 29 | 39 |
| 英書 | 第四門 | 医書 | 14 | 6 | 11 |
| 英書 | 第五門 | 法律書 | 29 | 22 | 23 |
| 英書 | 第六門 | 博物書 | 8 | 6 | 8 |
| 英書 | 第七門 | 物理書 | 13 | 4 | 12 |
| 英書 | 第八門 | 文法書 | 13 | 11 | 13 |
| 英書 | 第九門 | 数学書 | 52 | 14 | 51 |
| 英書 | 第十門 | 修身書 | 11 | 5 | 9 |
| 英書 | 第十一門 | 兵書 | 46 | 18 | 41 |
| 英書 | 第十二門 | 地理書 | 26 | 11 | 25 |
| 英書 | 第十三門 | 教育書 | 25 | 6 | 6 |
| 英書 | 第十四門 | 政治書 | 13 | 8 | 8 |
| 英書 | 第十五門 | 経済書 | 13 | 13 | 13 |
| 英書 | 第十六門 | 化学書 | 3 | 2 | 3 |
| 英書 | 第十七門 | 生理書 | 2 | 2 | 2 |
| 英書 | 第十八門 | 会話 | 568 | 5 | 568 |
| 英書 | 第十九門 | 詩文書 | 2 | 2 | 2 |
| 英書計 | | | 1,204 | 279 | 1,007 |
| 仏書 | 第一門 | 歴史 | 73 | 20 | 71 |
| 仏書 | 第二門 | 字書 | 32 | 12 | 28 |
| 仏書 | 第三門 | 窮理書 | 12 | 4 | 12 |
| 仏書 | 第四門 | 化学書 | 42 | 10 | 40 |
| 仏書 | 第五門 | 地理書 | 45 | 8 | 46 |
| 仏書 | 第六門 | 医学書 | 7 | 3 | 3 |
| 仏書 | 第七門 | 文学書 | 50 | 7 | 44 |
| 仏書 | 第八門 | 海陸兵書 | 19 | 10 | 15 |
| 仏書計 | | | 280 | 74 | 259 |
| 独書 | 第一門 | 辞書 | 73 | 17 | 35 |
| 独書 | 第二門 | 歴史 | 20 | 7 | 9 |
| 独書 | 第三門 | 地理及地図** | 9 | 4 | 4 |
| 独書 | 第四門 | 数学書 | 10 | 9 | 9 |
| 独書 | 第五門 | 医術書*** | 12 | 9 | 9 |
| 独書 | 第六門 | 文学書**** | 59 | 11 | 19 |
| 独書 | 第七門 | 兵書 | 17 | 3 | 17 |
| 独書 | 第八門 | 博物書 | 5 | 5 | 5 |
| 独書計 | | | 205 | 65 | 107 |
| 合計 | | | 1,689 | 418 | 1,373 |

*目次では「辞書」と表示されている。 ***目次では「医書」と表示されている。

目次では「地理地図」と表示されている。 **目次では「文学」と表示されている。

全冊数の30%強を占める英書第18門「会話」(5件568冊568部)のほとんどは当時日本国内で出版された簡略な会話のテキスト等である。その他、件数(=概ねタイトル数)に比して部数の多い物理、数学、地理、兵書等の分野で複数冊の教科書類が含まれ、法律、政治、経済、医学の分野では教科書等はほとんど含まれていないことを「表1」から読み取ることができる。

目録に用いられた学術用語

ところで、物理書は英書では第17門「物理書」、仏書では第3門「窮理書」と表示されている。英書第3門第1号『学術総録』(12冊)と独書第1門第1号マイエル氏『学芸字林』(17冊)に「百科事典」という訳語は用いられていない。また、英書第14門は「政治書」とあるが、目録に「政治」のつく日本語タイトルは存在しない。このように、本目録には学術用語等が確立していく過程にあった明治初期の姿が切り取られた形で残されているといえるのであろう。

2. 華族会館旧蔵洋書の調査

次に、学内を調査して華族会館から学習院に寄贈された洋書の所在を計836冊確認した(「リスト2」参照)。そのうえで『華族会館寄贈図書目録』とリンクさせた目録を作成した(「リスト3」参照)。

調査方法

最初に『華族会館寄贈図書目録』に基づいた調査を試みた。

『華族会館寄贈図書目録』に記載された内容を手掛かりに、冊子目録 *Catalogue of European Books in the Gakushuin Library* (Gakushuin, 1926) や学習院大学図書館備え付けのカード目録を調査し、原簿を参照して、明治30年以前に学習院図書館が受け入れた資料(登録番号から判別可能⁷⁾)で、かつ華族会館から学習院に寄贈された年である明治10年(1877年)までに出版されたものなかから幅広く候補を選び出して仮目録を作成した。この仮目録をもとに学習院大学図書館の蔵書を調査したところ、想定した候補と結果が合致するケースは7割程度に止まり、日本語で表示された目録をもとに洋書を全て特定することは不可能と認識せざるを得なかった⁸⁾。

そこで改めて『華族会館寄贈図書目録』から離れて、受け入れ年(明治30年以前)と出版年(1877年ごろまで)のみを条件に候補を選び出して別途作業用仮目録を作成した(1204件となった)。それに基づいて学習院大学の蔵書を調査して、資料に残された蔵書印や書き込み等を根拠に華族会館寄贈図書を特定した。その大半は現在大学図書館書庫に収蔵

されているが、一部は学内の法経図書センターや、文学部の哲学科、英語英米文化学科、ドイツ語圏文化学科に移管されている（「リスト2」参照）。

(1) 調査の手掛かり：蔵書印・署名・書き込み等

華族会館寄贈図書を特定する決め手は蔵書印である。加えて資料には旧蔵者のサインや日本語書名の書き込みなど当時の状況や寄贈者を知る手掛かりが残されている。

蔵書印

学習院図書館の印とは別に押印された「華族会館之印」「会館之章」「華族会館書籍局之章」「華族会館書籍局印」等の蔵書印によって華族会館旧蔵書を特定することができる⁹⁾。蔵書印はおおむね表紙を開いた最初の一葉（遊び紙）に押印されている。なかで「会館之章」はそれより後の表題紙あるいは本文最初の頁に押印されているため、表紙が欠落したり付け替えられた図書にあっても失われず、華族会館旧蔵洋書を特定する有効な手掛かりとなっている。

「華族会館書籍局印」と「華族会館之印」については周囲の状況から使用された時期を絞り込むことができる。「華族会館書籍局印」は、「華族会館学務局印」とともに印鑑そのものが学習院大学図書館書庫に保管されている。この2個の銅印が同じデザイン（丸形・桐の紋章入り）であることから同時期に作成されたものと推測される。そして明治8年11月27日に制定された「華族会館章程」によって「学務局」の設置が決定しているところから、「華族会館書籍局印」も明治8年11月以降に使用されたと推定することができる¹⁰⁾。「華族会館之印」は明治8年7月10日まで使用された可能性が高い（次項「勉学所用」参照）。蔵書印の使用時期は寄贈者を特定する手掛かりとなる。

「勉学所用」

表紙裏などに「勉学所用」と墨書された資料を計15件17冊確認した¹¹⁾。華族会館に当初置かれたのが「勉学所」であり、「勉学局」設置が決定したのは明治8年7月11日である¹²⁾。したがって「勉学所用」と記された資料は明治8年7月11日より前に華族会館が受け入れたものと考えられる。また「勉学所用」と墨書された書籍にはすべて蔵書印「華族会館之印」が押印されているところから、「華族会館之印」は明治8年7月11日より前に（寄贈または購入によって）受け入れた書籍に用いられたと推定することができる。

書名等の墨書

図書の見返し（表紙裏とその次のページ）に番号や日本語の書名等が墨書されている事例がある（リスト2参照）。その上に登録番号などを記したシールが貼られて墨書が判読でき

表 2. 華族会館旧蔵洋書に含まれる旧蔵者署名等入りの図書（冊数と件数）

| 署名等 | 旧蔵者名 | 資料の内容 | 冊数 | 件数 |
|------------------------|--------|-------------------|----|----|
| S.Toda 戸田三郎 戸田三良 | 尾崎三良 | 法学、政治、経済、軍事、歴史、文学 | 25 | 16 |
| Sanejo Mushanokoji | 武者小路実世 | 独文学等（レッシング著作集他） | 20 | 4 |
| Y Okada | 岡田□〔？〕 | 独文学 （ゲーテ全集他） | 19 | 2 |
| 計 | 3名 | | 64 | 22 |

ないケースもある。まれに墨書した紙が表紙や表紙裏に貼付されている図書や、紙が貼られた痕跡だけが残っている図書も見受けられる。表紙が欠落したり新しい表紙に付け替えられた図書では、表紙裏等に記された記録もあわせて失われている。

書きこまれている番号や書名等が『華族会館寄贈図書目録』に記載された内容と一致するケースの他に、異なっているケースや、異なっているけれども関連性が窺われるケースもある（リスト3参照）。『華族会館寄贈図書目録』に「マヌエル氏『化学書』一部十七冊」と記載されているシリーズの図書のなかには、共通の「一部十七冊」を含む「仏雑書第九号一部十七冊」等と書き込みがなされているものがあり、17冊を1セットとして扱う『華族会館寄贈図書目録』とは別の目録が存在したことを示している。また、『華族会館寄贈図書目録』に『クワケンブス小合衆国史』『ホツペーウオルク雑書』と記載されている図書の背には、それぞれ『クハケンボス小米国史』『モレスラーレ氏雑書』¹³⁾と書かれた紙が貼られている。「クワケンブス」は「クハケンボス」に、「合衆国史」は「米国史」に表示が変っている。ホツブスの著作集は編集者であるモレスラーレの著作と解釈されたようである。このように様々に書き込まれている書名等から、時代を追っておそらく明治20年代前半まで¹⁴⁾、『華族会館寄贈図書目録』の他にも洋書を日本語で記載した目録が何種類か作成されたことが窺われる¹⁵⁾。

旧蔵者サイン入りの図書

華族会館旧蔵洋書のなかに日本人の署名等のある資料を計22タイトル確認した（表2参照）。華族会館の設立に力を尽した尾崎三良が明治2年から6年にかけてロンドン、オックスフォード、ニューヨーク等で入手した法律書や経済書等は華族会館にかける彼の思いを伝えている。実篤の父である武者小路実世は明治4年11月から明治7年までドイツに留学、明治8年6月6日華族会館において行われた選挙で幹事に選出され、同年12月10日に司計局長兼務となった¹⁶⁾。その寄贈書は文学書・語学書である。ゲーテ全集の旧蔵者Y.Okadaの詳細はわからない。『華族会館誌』に上記3人から洋書が寄贈されたという記事が見当た

らないので、おそらく明治10年以降に華族会館から学習院に寄贈されたものであろう¹⁷⁾。

国内書店のシール・印鑑

表3. 国内取扱書店

| 書店名等 | 冊数 | 件数 |
|----------|-----|----|
| 瑞穂 | 131 | 46 |
| MARUYA | 11 | 11 |
| ハルトリー | 12 | 4 |
| YAMATOYA | 1 | 1 |
| 小計 | 155 | 62 |

図書の表紙裏などに書店や製本業者のシール、印等が残されているケースがある。そのなかで国内書店分(表3参照)は寄贈者等を特定する手掛かりとなる。「瑞穂」はいわゆる三文判で、ブラックストーンの『英国法律書』(*Commentaries on the laws of England*)のほか、医学書、工学書、歴史や数学等のテキスト類などの、珍しいことに裏表紙裏または本文最終ページに押印されている。「瑞穂屋」のものと考えられる。MARUYA

は丸善の旧社名、住所はNiphonbashidori…。『華族会館寄贈図書目録』に『チャーチャルスライブラリー』と記載された教育書のシリーズにシールが貼られている。YAMATOYAの住所はGinza 4.street, Tokai。『ベットアンドハンド』〔ママ〕(Fraser, R. W., *Head and hand, or thought and action in relation to success and happiness*)にシールが貼られている。ハルトリーの住所は大坂と横浜があり、ウェブスターの*National pictorial dictionary*のほか教科書類に押印されている。

「聖上…」と記された反古紙

蔵書印等の朱肉によって中身が汚れることがないようにと罫紙を小さく切って本の頁に挿んだものが、そのまま華族会館旧蔵洋書のなかに残っているのを合計9枚確認した。その中の3枚に「来日聖上本館江…」等と書かれていることに着目する¹⁸⁾。捨て忘れられたのではなく「聖上」という文言をみて元に戻された可能性の高いその3枚の存在は、戦前の天皇の威力を今に伝えているといえるであろう。

ところで「聖上」即ち明治天皇の華族会館への行幸は明治8年10月7日、華族会館が宮内省からその「宣告」を受けたのは三日前の10月4日であった¹⁹⁾。罫紙には細川氏等の館員達に当日の予定を知らせる内容が記されていたと考えられる。当時はまだ「聖上」という語が記されている罫紙を特別扱いにすることはなかったであろう。その結果反故紙となり本に挿まれて現在に至ったこれらの罫紙の切れ端は、蔵書印を押して本の整備がなされた時期(=明治8年10月4日以降)を解明する手掛かりともなっている。

所在目録とリンク版目録の作成

ここまでの実地調査によって836冊の所在を確認し、華族会館旧蔵洋書目録を作成した(「リスト2」参照)。そのうえで『華族会館寄贈図書目録』に記載されている418件1,689冊(「リスト1」参照)とおおよそのリンク付けを行い、リンク版目録を作成した(「リスト3」

参照)。

表 4. コレクションの言語別内訳

| 言語別 | 冊数 | 件数※ | 書誌件数 |
|-----|-----|-----|------|
| 英書 | 509 | 221 | 216 |
| 仏書 | 175 | 76 | 71 |
| 独書 | 152 | 50 | 50 |
| 計 | 836 | 347 | 337 |

※寄贈者が異なる場合などに、リンク版リスト作成等の便宜上、目録を重複して作成した(該当は英書5件、仏書5件、計10件)。

表 5. コレクションの部門別内訳

| 部門 | 内容 | 冊数 | 件数※ | 書誌件数 |
|----|------|-----|-----|------|
| 0 | 総記 | 37 | 4 | 4 |
| 1 | 哲学 | 33 | 14 | 14 |
| 2 | 宗教 | 6 | 3 | 3 |
| 3 | 社会科学 | 113 | 75 | 73 |
| 4 | 語学 | 122 | 45 | 42 |
| 5 | 自然科学 | 128 | 61 | 60 |
| 6 | 産業 | 58 | 36 | 35 |
| 7 | 芸術 | 7 | 6 | 6 |
| 8 | 文学 | 75 | 11 | 11 |
| 9 | 歴史地理 | 257 | 92 | 89 |
| 計 | | 836 | 347 | 337 |

※寄贈者が異なる場合などに、リンク版リスト作成等の便宜上、目録を重複して作成した(該当は社会科学2件、語学3件、自然科学1件、産業1件、歴史地理3件、計10件)。

3. 華族会館旧蔵洋書の概要

(1) コレクションの内容

所在を確認した華族会館旧蔵洋書の内訳を表4、表5に記す。歴史地理、社会科学、自然科学の図書が多く、なかでもヨーロッパ史が114冊、軍事が46冊を占めている(リスト2参照)。勉学所等のために準備されたのであろう、子供用から壮年用までの地理、数学、物理、軍事、語学、歴史等の教科書類が相当な冊数を占めている。

コレクションの圧巻はブラックストーン(Blackstone, William, Sir, 1723-1780)、ギボン(Gibbon, Edward, 1737-1794)、ギゾー(Guizot, François Pierre Guillaume, 1787-1874)、ヒューム(Hume, David, 1711-1776)、スモレット(Smollett, Tobias George, 1721-1771)、ミル(Mill, John Stuart, 1806-1873)、トクヴィル(Tocqueville, Alexis Charles Henri Maurice Clerel de, 1805-1859)等の著作をはじめ、歴史、法学、政治、経済、医学等に関する書籍の群である。なかには図書館用に立派な革製本の施されたものも見受けられる。

その他コレクションの特色を表わしていると考えられる作品を何点か次に列記する。(『華族会館寄贈図書目録』に記載されている著者・書名等と冊数を括弧を付して加える。)

個人著作集

ベーコン (Bacon, Francis, 1561-1626) (『婆魂著書』7冊)、ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von, 1749-1832) (『ギューテ氏文集』16冊)、ホッブス (Hobbes, Thomas, 1588-1679) (『ホッペー ウォルク 雑書』16冊)、レッシング (Lessing, Gotthold Ephraim, 1729-1781) (『レッシング文集』13冊)、ウォルター・スコット (Scott, Walter, Sir, 1771-1832) (『ワルタースコット小説伝記』24冊)、タキトゥス (Tacitus, Cornelius, AD56-AD117) (『タシタス氏著書』8冊)の著作集。ゲーテ全集はY.Okada旧蔵書、レッシング全集は武者小路実世旧蔵書、タキトゥス著作集は尾崎三良旧蔵書。ベーコン、ホッブス、スコットの著作集はおそらく徳川宗家から寄贈されたものであろう(後述)。なお、ホッブス著作集は当時国内では華族会館のみが所蔵していた可能性が高い²⁰⁾。

百科事典等の参考図書

英語とドイツ語の百科事典、Knight, Charles, *The English cyclopaedia: a new dictionary of universal knowledge*. 1856-1868. (『学術総録』12冊)、Meyer, Hermann J., *Neues Konversations-Lexikon*. 1871. (マイエル氏『学芸字林』16冊)を始め、医学、数学、歴史、地名、人名等に関する事典類。各冊とも1000頁を超えており、含まれる情報量は膨大である。西欧文明を学ぼうとする人々にとって貴重な存在であったろう。なお、当時国内で英語の上記百科事典を全巻所蔵していたのはおそらく華族会館のみである²¹⁾。

産業関連書・実用書

当時の日本ですぐに役立つと思われる医学書、農業書など。次に挙げる数点からは、それらを選んだ人物(おそらく勝海舟と瑞穂屋卯三郎)の関心の一端が窺える。

Nouveau manuel complet des alliages métalliques. Paris, 1839. 〈金属合金術〉

Nouveau manuel complet du marbrier, du constructeur et du propriétaire de maisons... Paris, 1855. 〈大理石産業〉

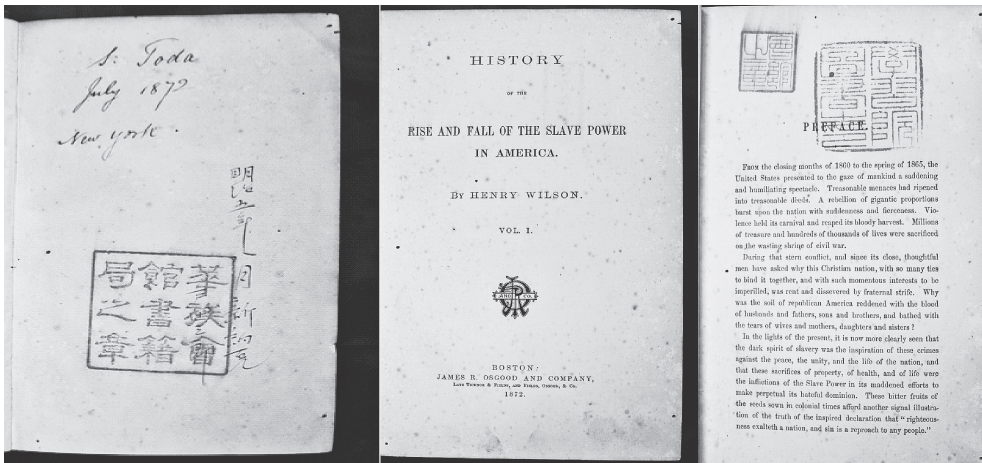
Nouveau manuel complet du bouvier, du zoophile, du berger, du fermier et de l'herbager. Paris, 1844. 〈牧畜業〉

(マヌエル氏『化学書』〔ママ〕) 1850年前後にフランスのRoret社から出版されたManuels Roretシリーズ。(目録では書名の一部“manuel”が著者とされている。)

Das Münzen-Buch. 2. Aufl. Bremerhaven, 1871. (『各国貨幣書』)

Thomson, Andrew, *Freight charges calculator*. Philadelphia, 1868. 〈列車運賃計算法〉(『トムソン計算表略』)

Day's American ready reckoner: containing tables for rapid calculations of aggregate values, wages, salaries, board, interest money, timber, plank, board, wood, and land measurements, with explanations



(扉)

(表題紙)

(前書)

図2 戸田三郎(尾崎三良)サイン入りの図書

- ・扉に戸田三郎の署名がある。“S. Toda July 1872 New York
明治五年八月新約克 戸田三郎”
- ・扉に蔵書印「華族会館書籍局之章」が押印されている。
- ・前書の頁に蔵書印「会館之章」「学習院図書印」が押印されている。

of the proper methods of reckoning them, and simple rules for measuring land. By B.H. Day. New York, 1866. 『各種計算法』(『デース計算書』)

時代を映す稀観書

当時の歴史を反映する稀観書3点。

Wilson, Henry, *History of the rise and fall of the slave power in America*. Boston, 1872. (『亜国黒奴盛衰記』) 華族会館設立に貢献した尾崎三良が英国留学中の明治5年夏に英国から自費で渡米して、米国との条約改正交渉の中止を岩倉使節団の岩倉具視と木戸孝允に進言、日本の危機回避に貢献した²²⁾。その時にニューヨークで入手した日付・サイン入りの図書(図2参照)。サイン：“S.Toda July 1872 New York 明治5年8月新約克 戸田三郎”。尾崎は明治6年まで戸田姓。

Holstein, Anna Morris (Ellis), *Three years in field hospitals of the Army of the Potomac*. Philadelphia, 1867. (『スリーイヤールズドインフィールドホスピタル』[ママ]) アメリカ南北戦争時の野戦病院での看護についての一次資料といわれる。「瑞穂」の印が押されている。瑞穂屋卯三郎が1867年のパリ万博に参加した帰途にアメリカで購入した可能性も考えられる。(国内では学習院の他に金沢大学が所蔵。)

Watari, R., *Petite histoire de la guerre entre la France et la Prusse (juillet 1870-mars 1871)* par R. Watari, japonais étudiant à Paris. Paris, 1871. 63p. (ワタリ氏『戦争記』) 日本人による普仏戦争

史。ワタリ氏の詳細は不明。(国内では学習院の他に東京大学と国立国会図書館が所蔵。)

(2) 華族会館旧蔵洋書の寄贈者

次に、華族会館旧蔵洋書の寄贈者・旧蔵者を調査した。

前稿(注1参照)において洋書の寄贈に関する『華族会館誌』の記載内容を調査し、あわせて『華族会館誌』に購入資料に関する記録がないことを明らかにした。また、すでに見たとおり『華族会館寄贈図書目録』に洋書の寄贈者名等は記載されていない²³⁾。

以上の条件のもとで、図書に残された書き込みや『華族会館誌』『勝海舟日記』²⁴⁾に記載されている内容等を手掛かりに、所在を確認した各資料について寄贈者の特定を試み(表7参照)、「リスト2」に「寄贈者・旧蔵者(推定)」欄を設けてその結果を記載する。

表6. 洋書寄贈関連事項等一覧(『華族会館誌』から抽出)

| (明治)年.月.日 | 寄贈者等 | 内容 | 部数・冊数 |
|-----------|--------|---------------|----------|
| 8.2.25 | 土方雄志 | 各種洋書 | 30冊 |
| 8.3.21 | 五条為栄官員 | 儀式録(洋書) | 1部 |
| 8.3.30 | 毛利元敏 | 洋等書 | 8部のうち |
| 8.7.10 | 徳川氏 | 漢籍44部洋書624部 | 合計3,140巻 |
| 9.3.17 | 渡部章綱 | 英仏和会話初篇 | 500部 |
| 9.3.17 | 渡部章綱 | 英仏通語 | 50部 |
| 9.10.24 | 書籍局蔵書数 | 英1212仏261独213 | 1,686冊 |

(前稿(153-154頁)より形式を一部修正して転載)

洋書の寄贈に関連して『華族会館誌』に記載されている内容は表6のとおりである。その中の徳川家寄贈洋書「624部」は前稿で検討した結果から1,000冊ほどと考えられる²⁵⁾。

1. 明治8年2月25日の土方氏寄贈書と同年3月30日の毛利氏寄贈書には、前述のとおり華族会館の古い蔵書印「華族会館之印」が使用されていると推定され、それを根拠に特定する(『ギソ-開化史』Guizot, François Pierre Guillaume, *The history of civilization: from the fall of the Roman empire to the French revolution* (London, 1856-1870) 等17タイトル)。

2. 明治8年3月21日五条氏寄贈の「儀式録」は、華族会館旧蔵書のなかに他に類書がなく、内容から特定することができる(『風俗儀式法』*Le cérémonial officiel ou les honneurs, les préséances, les rangs et les costumes civils, militaires, maritimes, ecclésiastiques et diplomatiques*. 2. éd. Paris, 1868)。

3. 明治9年3月17日渡部氏寄贈の「英仏和会話初篇」500部と「英仏通語」50部は部数と内容から特定する(各1冊が後に学習院の蔵書として登録されている²⁶⁾)。『英仏和会話』松本孝輔 *Easy conversations in English, French, & Japanese for those who learn the English language*. Tokyo, 1873. 『英話通語』松本孝輔 *The modern conversations in English & Japanese: for those who learn the English language*. Tokei, 1873)。

以上の作業によって、所在を確認した資料(836冊)のなかから表6に記載した寄贈書を、

徳川宗家分を除いて、
絞り込むことが可能である。

4. 旧蔵者のサイン等のある洋書 22 件 64 冊（表 2 参照）についてはサイン等から旧蔵者を特定する。なお、これらは蔵書印から華族会館旧蔵書であることが明らかであるが『華族会館誌』に寄贈に関する記載が見当たらないため表 6 には含まれていない。

5. 国内書店取扱い分（表 3 参照）のうち丸屋、ハルトリー、YAMATOYA の取扱い分 14 件 22 冊は、華族会館によって購入され、おそらく徳川家からの寄付金 2,000 円をもって支払われたものと考えられる²⁷⁾。

6. 国内書店取扱い分（表 3 参照）のうち瑞穂屋分 46 件 131 冊は『勝海舟日記』の記載内容から徳川宗家からの寄贈書である可能性が高いと考えられる（後述）。

7. その結果、上記を除いたもの（245 件 597 冊）（表 7 参照）は全て、表 6 の徳川宗家からの寄贈書（624 部〈約 1,000 冊〉）に該当すると考えられる。上記瑞穂屋取扱い分とあわせると徳川宗家寄贈書は 291 件 728 冊となる。

但し、図書に徳川家から寄贈されたことを示す署名や蔵書印などの痕跡を見つけることはできなかった²⁸⁾。

以上のとおり、所在を確認した華族会館旧蔵洋書全 347 件 836 冊のうち、291 件（84%）728 冊（87%）が徳川宗家からの寄贈書であると推定される。海舟の日記によればこれらの洋書は瑞穂屋卯三郎から千百円で購入したものであって、海舟は、寄贈した書籍がその後華族会館から学習院に移ったことを承知していた²⁹⁾。

4. 徳川宗家が寄贈した洋書について—森有礼旧蔵書との関連性を探る—

本項においては、華族会館旧蔵洋書の中心を占め、コレクションを特徴づけている徳川宗

表 7. 所在を確認した華族会館旧蔵洋書の寄贈者別内訳（推定）（冊数・件数）

| 寄贈者名等（推定） | 推定の根拠 | 冊数 | 件数 |
|-----------|---------------------------|-----|-----|
| 土方雄志／毛利元敏 | 蔵書印「華族会館之印」（受入時期） | 19 | 17 |
| 五条為栄官員 | 内容 | 1 | 1 |
| 渡部章綱 | 部数と内容 | 2 | 2 |
| 尾崎三良 | 署名 | 25 | 16 |
| 武者小路実世 | 署名 | 20 | 4 |
| 岡田 Y（?） | 署名 | 19 | 2 |
| 購入 | 書店のシール等 | 22 | 14 |
| 徳川宗家 | 印「瑞穂」 | 131 | 46 |
| 徳川宗家 | 「洋書 624 部」* 「洋書書籍千部」** | 597 | 245 |
| 計 | | 836 | 347 |

*『華族会館誌』上巻 91 頁

**勝海舟「戊辰以来会計荒増」（『勝海舟全集』第 21 巻 594 頁）

家からの寄贈書の入手先に焦点を当て、森有礼旧蔵書との関連等を勝海舟の日記を軸として考察する。

徳川家から華族会館へ書籍と現金が寄贈された経緯が『勝海舟日記』に記されている（前稿参照）。明治7年12月30日に華族会館幹事の尾崎三良から依頼を受けて、明治8年7月10日「華族会館へ三位殿より金二千両、洋漢書籍二千余巻相納む」と日記にあるように海舟の手で華族会館に運び込まれた³⁰⁾。洋書は瑞穂屋から入手したものであった。徳川家から瑞穂屋に明治7年4月9日と4月23日に貸し付けていた1,100円を返金させるかわりにその分の洋書を納めさせたのである。

この貸付金は『明六雑誌』を出版する資金であった可能性が高いと考えられる³¹⁾。瑞穂屋清水卯三郎が明六社（日本最初の近代的学術団体といわれる）の会計責任者であったこと、『明六雑誌』の創刊日とされる明治7年4月2日と貸し付けた日付が重なっていること、明六社社員の多くが旧幕臣であったこと、海舟が明治16年7月1日の「明六会」に招待されていること³²⁾等と、次に述べる洋書調達の際の経緯とを考えあわせて導き出した推論である。

では瑞穂屋は洋書をどこから入手したのであろうか。

明治8年1月15日、海舟は日記に「卯三郎、百両持参並びに跡々の金子、書物にて納むべき旨談ず」と記している。この求めに応じて瑞穂屋は洋書1,000冊を2か月という当時としては驚異的なスピード（筆者の図書館職員〈受入れ担当〉の経験から）で取り揃えて3月10日に納品している。内容的にも華族会館向けに百科事典、歴史書、法律書等が丁寧に選ばれている。注文して1週間後にはリストを受け取っているところを見れば、海舟に具体的な目星があつての発注だったのであろう。そこで考えられるのは瑞穂屋の在庫分に合わせて洋書のかなりの部分を、卯三郎が会計を担当していた明六社の社長森有礼（後の文部大臣）から入手した可能性である。

森は明治4年初めから6年3月まで外交官としてアメリカに滞在していた間に、東京に図書館を開く目的で図書を購入していた。それを全て商法講習所（一橋大学の前身）設立の資金に充てるために7,000円で文部省に売却したといわれる³³⁾。

森の商法講習所協同創立者・富田鉄之助（後の日本銀行総裁）は、海舟が長男小鹿の米国留学に随行を命じた人物。当時はニューヨーク在留領事で、明治7年7月から同年11月まで賜暇帰朝していた。その日本滞在中に計6回海舟邸を訪問したことが海舟の日記に記されている³⁴⁾。二人の間で商法講習所設立に向けた動きも話題に上ったに相違ない。東京府知事大久保一翁（無名だった勝海舟を発掘し、ともに江戸城無血開城に貢献した元会計総裁）宛「一封認め」たりして（明治7年11月16日）、海舟も奔走する富田に協力したと考えられる。「森有礼へ、商法教師用度として千両、相助け申すべき旨申し遣わす」（明治8年8月28日）と日記にあるように自身もその後資金援助をしている。

これらの背景を考えれば、海舟が商法講習所設立に協力するためにも、森有礼の蔵書の一

部を購入して華族会館の蔵書として活かそうと考えた可能性は大きい³⁵⁾。

コレクションがあらかじめ図書館用に吟味して集められたなかからピックアップされたものと考えれば、当時発注から2カ月で洋書が納品されたとしても納得がいく。

森はアメリカで、ウェブスターの秘書や下院図書館長を務めたこともあるチャールズ・ランマンを当初私設秘書として雇っていた³⁶⁾。集書にはその手助けがあった可能性もある。

東京に開設予定の図書館のために地球儀を贈ると申し出た書店 Steiger 宛の 1873 年 2 月 28 日付の森の礼状の存在が報告されている³⁷⁾。同書店宛の同年 3 月 14 日付の手紙のなかで森は日本と取引するのならと瑞穂屋卯三郎と思われる人物 (Mr. Wusaburo Mitsuboya, a Bookseller of Yedo) を紹介している³⁸⁾。明治 6 年に卯三郎は、Steiger をとおして森の図書館開設計画を知っていたのかもしれない。

しかし残念ながら、これまでの調査で華族会館寄贈図書に森有礼旧蔵書が含まれることを具体的に裏付ける文献を見つけることができなかった。

選書の基準

ところで海舟の日記に「卯三郎、書目持参。」(明治 8 年 1 月 22 日)、「卯三郎、書物の事申し談ず。」(2 月 13 日)、「卯三郎、書目帳持参。」(2 月 19 日)、「瑞穂屋より洋書来る。」(3 月 10 日)、「卯三郎、書目持参。」(3 月 15 日) と納入までの経緯が記されている書籍を、海舟と瑞穂屋卯三郎はどのような基準で選んだのであろうか。

前稿で触れたとおり、徳川藩は明治元年から 5 年に廃止されるまで、静岡学問所と沼津兵学校という国内最高峰といえる学校をその領地につくっていた。後に静岡県立中央図書館葵文庫に移管された静岡学問所等旧蔵洋書の内訳は、蘭書が 284 タイトル、英書が 269 タイトル、仏書が 244 タイトル、独書が 19 タイトル、その他が 19 タイトルである³⁹⁾。そのなかの英書について書名等をもとにおおまかに分類してみると、総記が 11 件、哲学が 16 件、宗教が 4 件、社会科学が 45 件、語学が 21 件、自然科学が 45 件、産業が 20 件、芸術が 6 件、文学が 10 件、歴史地理が 91 件となり、その構成比率は華族会館旧蔵書のものと同様である(表 5 参照)。そこから海舟たちが静岡学問所の蔵書をモデルとして選書した可能性が考えられる。葵文庫にロシアに関する図書が辞書など 8 点ほど含まれているのは徳川幕府・静岡藩がロシアの動向に注目していた表れであろう。華族会館旧蔵書のなかのロシア外交に関連した一冊、David Urquhart, *Progress of Russia in the West, North and South*… (ウルキュハルト『魯国進歩史』〈「進歩」ではなく「進攻」と訳すのが妥当?〉) にその流れが感じられる。

また、森有礼が設立し、清水卯三郎(瑞穂屋)が会計を担当した明六社には、静岡学問所の教授であった津田真一郎、中村正直、杉享二、沼津兵学校長であった西周等も参加していた。徳川宗家のために華族会館向けの図書を選択するのに彼らも協力したのかもしれない。少なくとも、明六社が発行した『明六雑誌』に彼らが執筆した論文を海舟たちが選書の参考に

した可能性は高い。箕作麟祥による抄訳が掲載された(7号) Henry Thomas Buckle の *History of civilization in England* (ボックル『英国開化史』) が寄贈書に加えられ(学習院に寄贈された後の所在は不明)、「賢相ピット」が加藤弘之(4号)、杉亨二(5号)によって紹介されているのに触発されたのか、Philip Henry Stanhope の *Life of the Right Honourable William Pitt* (ステンホープ『ピット彪的伝』) が寄贈書に含まれている。また中村正直がその著作 *On liberty* を翻訳した Mill については、箕作麟祥(9号)、阪谷素(35号)、西村茂樹(36号)、西周(38号) が取り上げている。なかでも中村正直による論文「西学一斑」(1-7) には、Bacon(10、12、16、23、39号)、Hobbes(12、39号)、Hume(12、23号) が取り上げられている⁴⁰⁾。(但し、Hobbes が詳しく紹介された39号は、卯三郎が海舟邸に洋書を届けた後の明治8年6月に刊行された。)

さらに中村正直が翻訳してベストセラーになったという『西国立志編』⁴¹⁾ に登場する人物、Bacon、Goethe、Grote、Mill、Peel、Scott などの著作が華族会館旧蔵書に含まれている⁴²⁾。

当時中村正直のもとで、明治4年の廃藩置県により東京に移り住むまで静岡学問所の生徒でもあった旧静岡藩主(徳川宗家第16代)徳川家達³⁾が学んでいた。「六年二月家塾を邸内に設け、始めて生徒を教育せり。名けて同人社といふ…徳川従三位公、亦日々来学したりしが、其の邸遠くして通学に便ならざりしが為め、一校を麴町平河町に設け、名けて同人社分校といふ」と石井民司著『中村正直伝』にその経緯が語られている⁴³⁾。

これらの状況から、しばしば海舟邸を訪問し、「その理想とする国家がイギリスの立憲君主制にあった」⁴⁴⁾ 中村正直が海舟たちの選書に影響を与えた可能性は大きいと考えられる。

一方で、ルソーやモンテスキューは寄贈書に加えられなかった。

『郵便報知新聞』明治8年4月25日号には「本月輸入仏国書籍」という表題で34点の洋書を紹介する瑞穂屋卯三郎の広告が掲載されている⁴⁵⁾。3月10日に海舟のもとに洋書を納品してから1半月後の広告であるところから、これらは華族会館用に加えられなかったものである可能性が高い。そのなかには以下の著作も含まれている⁴⁶⁾。(括弧内に、該当すると思われる著者名と原書名を付記⁴⁷⁾。)

モンテスキュー、スピリット、ド、ロワー (Montesquieu, Charles de Secondat, baron de, *De l'esprit des lois*) 〈モンテスキュー『法の精神』〉

ルーソウセフ、ド、ウーブル (Rousseau, Jean-Jacques, *Petits chefs d'oeuvre de J.J. Rousseau*) 〈J. J. ルソー傑作集〉

バツトル、ドロワ、ド、ジエン (Vattel, Emer de, *Le droit des gens ou principes de la loi naturelle*)
〈ヴァッテル『国際法』〉

プラザイル万国公法 (Pradier-Fodéré, P., *Nouveau droit international public*)

シレイ、法律全書 (Sirey, J. B., *Les codes annotés*)

デラコウチイ、レジスラツシオン (Delacourtie, Emile, *Eléments de législation usuelle*) 〈ドラクル
チー『仏国政典』〉

ガルニイエコノミイ、ポリチク (Garnier, Joseph, *Premières notions d'économie politique sociale ou
industrielle*) 〈ガルニエ『経済学』〉

海舟は瑞穂屋に在庫があつたにもかかわらず、華族会館に寄贈する洋書にこれらのフランス書を、モンテスキューの『法の精神』⁴⁸⁾ や、ヴァッテルの『国際法』⁴⁹⁾ 等『明六雑誌』に抄訳が掲載されたものを含めて、加えなかったことが窺われる⁵⁰⁾。

華族会館と文部省の図書館開設計画

ここで視点を変えて、勝海舟の日記をとおして華族会館、文部省それぞれの図書館開設計画について森有礼旧蔵書との関連で考えてみる。

海舟の明治8年1月1日の日記に「学士モルレー。」とある。この日、日本の近代教育の確立に指導的役割を果たしたといわれる文部省学監ダビット・モルレーが、おそらく通訳として畠山義成・別名杉浦弘蔵を伴って、海舟を訪問していた⁵¹⁾。

明治6年3月15日、モルレーがワシントンの日本公使館において雇用契約書に署名するのに立ち会ったのは森有礼と考えられている⁵²⁾。畠山義成は慶応元年(1865)森有礼とともにイギリスへ向かった薩摩留学生のひとりで、後にアメリカのラトガース大学でモルレーの教えを受け、帰朝後文部省に出仕、明治6年12月から東京開成学校長を務めていた⁵³⁾。海舟の明治6年10月9日、10日、15日等の日記に森有礼との交流が記されている。このように森と旧知の間柄であり、森の当時の動静を承知していたであろうモルレー、海舟、畠山の間で、明治8年元旦に華族会館と文部省の書籍館開設計画についての情報交換がなされた可能性は高い。あるいは、この日を契機に文部省の書籍館(再建)計画は具体性を帯びたのではないだろうか。そのように推理できるヒントが海舟の日記のなかに見出される。

海舟が明治7年12月30日に尾崎三良から協力を依頼された華族会館の書籍館設立計画について、明治7年12月30日、31日、明治8年1月15日の日記には「書籍館」と記されているのが、1月18日、19日、20日には「華族方書籍館」「華族書籍館」と、「書籍館」に「華族」を加えて表示されている。これは、明治8年に入って大きな動きのあつたもうひとつの「書籍館」の動向を海舟が認識した結果の現われであろう。

明治5年8月1日、文部省が湯島の聖堂に開設したわが国最初の公共図書館「書籍館」は、明治6年3月19日に太政官の博覧会事務局に合併され、明治7年には浅草の官庫に移転していた。それを、明治8年2月9日文部省は博覧会事務局に蔵書や物品をすべて引渡して、「書籍館」の制度だけを文部省所管に復帰させた。同年3月13日その「書籍館」の館長に畠山義成が就任し、文部省から新たに1万冊余りの交付を受けて、4月8日には「東京書籍館」と改称して5月17日に湯島の聖堂において閲覧を開始したのであつた⁵⁴⁾。モルレーは、

東京書籍館設立の動機を「維新以降諸省及学校の為に首として書籍を蒐集する事を要せり」と『日本教育史略』のなかで述べている⁵⁵⁾。

モルレー達が図書館整備の必要性を感じていたであろうときに、森有礼は東京に図書館を開設する予定で収集した数千冊の洋書を全て、商法講習所開設の資金に充てるために売却しようとしていた。森の動きを海舟も富田を通じて承知していたにちがいない。この状況のもと明治8年の早い時期に、文部省側と海舟たちは相互に了解したうえで、森有礼の蔵書の大半を文部省が東京書籍館向けに買い上げる一方で、海舟たちは華族会館向けに歴史、軍事、産業等関連の書籍を購入したのであろう。筆者はそのように推理する。

華族会館と東京書籍館の蔵書

そこで華族会館旧蔵洋書と東京書籍館の洋書を比較してみよう。もし華族会館旧蔵書に森有礼旧蔵書が含まれていれば、両者の内容に共通する要素、相補う部分が存在すると推測される。

最初に東京書籍館蔵の洋書と森有礼旧蔵書の関係を検証する。

森有礼は前述のとおりアメリカで購入した図書を全て文部省に売却したといわれる。

「文部省は、その蔵書1万冊余を書籍館に交付して、新たに書籍館を創設し「東京書籍館」と称して、5月に開館した⁵⁶⁾。『上野図書館八十年略史』には「本省は、所蔵の1万余冊を書籍館に交付して基本の蔵書となし⁵⁷⁾とあるが、交付された1万冊の和洋の内訳には触れていない。

ところが、1876年(明治9年)発行の『アメリカ合衆国における公共図書館』の序文の一節にモルレーからの情報として、東京書籍館所蔵の洋書の中心は森有礼の旧蔵書であり、蔵書数は洋書が6,000冊余、和漢書が4,000冊であると記載されている⁵⁸⁾。これは、モルレーが蔵書の交付に実際に関わって内訳を知っていたことを示すものであろう⁵⁹⁾。同様に、モルレーが森有礼の蔵書の買い上げにも関わっていた可能性を示している。

そこで、東京書籍館が明治9年6月に刊行した洋書目録⁶⁰⁾を詳しくみると、トーマス・レイク・ハリス(Harris, Thomas Lake)、ローレンス・オリファント(Oliphant, Laurence)やチャールス・ランマン(Lanman, Charles)など森有礼と個人的に関わりの深かった人物の著作が含まれている⁶¹⁾。

また、国立国会図書館の蔵書のなかで蔵書印またはサイン等によって森有礼旧蔵本であることが確認できる洋書を対象として作成されたリスト(中林隆明「森有礼旧蔵の洋書について〈仮リスト〉」『参考書誌研究』第38号〈1990年〉51-52頁)と照合すると、そこに記載された全13タイトルとも東京書籍館の洋書目録に含まれていて⁶²⁾、文部省が森有礼から買

い上げて東京書籍館の蔵書となったものである可能性がきわめて高い⁶³⁾。

以上の事例を裏付けとして、モルレーの情報のとおり東京書籍館所蔵の洋書 6000 冊余の核となる部分は森有礼の旧蔵書であるといえるであろう。

東京書籍館の洋書目録には、『アラビアンナイト』、アダム・スミスの『国富論』、ダーウインの『種の起源』、グロチウスの『戦争と平和の法』、『ナポレオン法典』等が記載されている。その他 Bacon、Bentham、Edmund Burke、Chateaubriant、Corneille、Goethe、Molière、Montaigne、Montesquieu、Racine、Rousseau、Schiller、Shakespeare、Voltaire 等の著作集や Britannica の百科事典、フランスの法令集 Dalloz の *Répertoire de législation* (49 冊)、Boston Public Library や Congress Library の蔵書目録等も含まれ、*British blue books* など、おそらく岩倉使節団に文部理事官として随行していた田中不二麿たちが収集したと考えられる各国の公機関の報告書も相当数含まれている⁶⁴⁾。

華族会館が書籍館創設に動き始めていた明治 8 年 5 月には、これらの図書を湯島の東京書籍館へ行けばだれでも自由に読むことができるようになり、翌年には欧文の蔵書目録も整備されたのである⁶⁵⁾。

東京書籍館の洋書目録の記載数を数えると、英書が 2,844 件 4,594 冊、仏書が 559 件 949 冊、独書が 412 件 707 冊、計 3,815 件 6,250 冊である⁶⁶⁾。分野別では英書仏書独書を合せて、哲学が 262 件 320 冊、社会科学が 1,554 件 2,602 冊、自然科学が 721 件 1,011 冊、文学・芸術が 597 件 947 冊、歴史地理が 451 件 777 冊、事典等が 230 件 593 冊となり、全体のなかで歴史地理書の占める割合が比較的小さい。

一方の『華族会館寄贈図書目録』には 108 件 332 冊の歴史地理書が記載されている。

所在を確認した華族会館旧蔵洋書 347 件 836 冊について東京書籍館の蔵書目録と照合すると、東京書籍館の蔵書目録にも書誌が存在する（即ち華族会館・学習院と東京書籍館の両方が図書を所蔵している）のは 115 件 314 冊、書誌が存在しない（即ち華族会館・学習院が所蔵している一方で東京書籍館には所蔵がない）のは 232 件 522 冊である。徳川宗家からの寄贈書である可能性が高い図書のなかで筆者が森有礼旧蔵書と推定する 245 件 597 冊については、それぞれ 77 件 226 冊と 168 件 371 冊となる⁶⁷⁾（リスト 2 参照）。

このように華族会館と東京書籍館の双方が所蔵している図書よりも一方のみが所蔵しているものの比率が高く、両館の役割が異なることを示している。

個別にみると、華族会館旧蔵書に Hobbes の著作集が含まれている一方で東京書籍館の蔵書目録にはホッブスの著作は 1 冊も含まれていない。また、『華族会館寄贈図書目録』に

『小経済書』『大経済書』『英氏経済論』が記載されている Francis Wayland の経済書が、東京書籍館の目録には含まれていない。

Hume の著作では、*The history of England, from the invasion of Julius Caesar to the Revolution in 1688* (全5冊) が華族会館旧蔵書に含まれ、東京書籍館蔵書目録には *Philosophical works* (全4冊)、*Essays, literary, moral and political* と *Student's history of England* が記載されている。

Smollett の *The history of England, from the Revolution to the death of George the second* (全3冊) は華族会館が、*The works of Tobias Smollett: carefully selected and edited...* (623 p.) は東京書籍館が所蔵している。

Tocqueville の *Democracy in America* は華族会館と東京書籍館、*On the state of society in France before the revolution of 1789* は華族会館、*American institutions and their influence* は東京書籍館が所蔵している。

John Stuart Mill の著作のうち *Dissertations and discussions*、*Essays on some unsettled questions of political economy*、*On liberty*、*Subjection of women* の4点は華族会館と東京書籍館が所蔵。*Thoughts on parliamentary reform* は華族会館、*Auguste Comte and positivism*、*Autobiography*、*Examination of Sir William Hamilton's philosophy*、*Considerations on representative government*、*Principles of political economy*、*Scottish university addresses*、*System of logic*、*Three essays on religion*、*Utilitarianism* の9点は東京書籍館が所蔵している。

百科事典については、華族会館は Charles Knight の *The English cyclopaedia: a new dictionary of universal knowledge* (全12冊) を揃いで、東京書籍館はそのなかの *Biography* 編 (全6冊) を所蔵。Meyer の *Neues Konversations-Lexikon* を華族会館と東京書籍館の両館が所蔵。東京書籍館はその他 *Encyclopaedia Britannica* の8版 (全22冊) を2セット、*Konversations-Lexikon (Allgemeine deutsche Real-Encyclopädie für die gebildeten Stände)* (全15冊) と *Bluntschli's Deutsches Staats-Wörterbuch* (全11冊) を所蔵している。

法律、政治の事典 (Bouvier, John, *Law dictionary*、Block, M., *Dictionnaire général de la politique*.) は東京書籍館が所蔵。

Sammlung gemeinverständlicher wissenschaftlicher Vorträge (Berlin, 1869-1870) (全5冊) を華族会館は揃いで、東京書籍館は端本 (Heft 38、75、76等9冊) を所蔵している。

このように二つのコレクションを対比してみると、森有礼旧蔵書という一つの塊が、明治8年に徳川宗家の支払額 1,100 円と文部省買い上げ価格といわれる 7,000 円にほぼ比例する割合で、華族会館向けには将来の貴族院議員としての活動に備えるための書籍を中心に選択され、残りの大部分が「諸省及学校の為」に東京書籍館に分けられた可能性は十分あると思われる。

しかし残念ながら、華族会館旧蔵書の表紙、表題紙等にそれを証明する痕跡を見つけるこ

とができず、推測にとどまっている。

終わりに

華族会館設立を推進した秋月種樹は、設立の動機を将来華族が貴族院議員の任を果たすためであったと述べている。

華族会館創設事略序

明治四年、河鱈実文君從英国歸、謂余曰、英国上下二院、以議定国政、上院則貴族充之、下院則平民充之、凡英国之所以富強者、議院之力也、我国他日必有開議院之事、而不得不得倣英国之制也、維新以來、華族解常職、麀集輦下、故不免尸素之譏、若開議院、何以堪上院議員之任哉、因欲建設華族会館、講習議法、時尾崎三郎亦自英国返、大贊其說、…
(秋月種樹著『華族会館創設事略』〈東京、河鱈実文、明治22年〉1頁)

華族会館設立発起人たちは明治7年2月4日に「仮規則」四十九条を決定した。そのなかで「法律学及び其他華族の義務とすべき事を博学多識の人に就き講究する為めに」講義局を設けること(第4章第26条)。その講義内容は「第一、万国公法、第二、巴力門之理及び其沿革、附華族の義務権利等、第三、法律、第四、泰西各国政法治乱沿革並風俗の変革等、第五、宗旨の義」(第4章第27条)とすることと定めている⁶⁸⁾。

華族会館が収集した洋書はこの会館設立の趣旨に沿ったものであったといえるであろう。ベーコン、ホップス、ゲーテ、ギボン、ブラックストーン、ヒューム、スモレット、トクヴィル、ミルの著作や英国の政治家ロバート・ピールの回想録、ウィリアム・ピットの伝記等がコレクションの特色を示している。

資料の収集には勝海舟をとおして徳川宗家が協力した。奇しくも英国留学から戻った宗家第16代徳川家達は貴族院議長として30年間(明治36年から昭和8年まで)、華族会館館長として37年間(明治31年から昭和10年まで)にわたって活躍している。

華族会館旧蔵洋書には尾崎三良、勝海舟、瑞穂屋清水卯三郎など当時の様々な立場の人々の日本の近代化に向けたおもいが結集している。

後の文部大臣・森有礼による商法講習所(一橋大学の前身)設立を支援した海舟は、明六社にも資金援助していたと思われる。その流れで、森が東京に図書館を設立する目的でアメ

リカから持ち帰った蔵書の一部を購入して華族会館へ寄贈するように海舟が段取りをした可能性が高いと考えられるが、結論を得るには至らなかった。

明治8年東京開成学校（東京大学の前身）から刊行された蔵書目録『東京開成学校文庫書目英書之部』（欧文）には857タイトル10,483冊が記載されている⁶⁹。明治8年に開館した東京書籍館（国立国会図書館の前身）の蔵書目録には約3,800タイトル6,000冊余の洋書が記載されている。徳川藩が設立し明治5年まで存続した静岡学問所等から静岡県立中央図書館葵文庫に引継がれた洋書は835タイトルである。

これらの蔵書に学習院所蔵の華族会館旧蔵書を加えることで、明治初期の日本において近代化に向けて収集された洋書の全体像の把握への展望が開けるであろう。

付記

明治初期の学習院に華族会館から寄贈されたゲーテ全集、アンデルセンの童話集、挿絵が多数入った医学書や英語ドイツ語の百科事典が備わっていたことを知って感嘆したが、コレクションの中心はベーコン、ホップス等の著作集やピールの回想録などである。

江戸時代の武士たちは藩校や昌平黌で中国の古典を学ぶことで為政者としての素養を身に付けた。維新後の混乱期にあって、イギリスにおける上院議員のような役割を華族が果たすための素養を身につけるのに必要な、漢籍に代わる新しい書籍を選択して、勝海舟たちが寄贈したのが華族会館旧蔵洋書であろう。

明治初期に郵便、鉄道、電信などのインフラ整備が次々となされていく状況が勝海舟の日記に記されている。同じころに貴族院開院に向けて華族会館が設立され、洋書が収集された。学習院に伝わる華族会館旧蔵書は、当時の日本国内において猛烈な勢いで進められた社会基盤整備の流れにつながるものであったともいえるのであろう。

2006年3月、学習院大学図書館書庫から華族会館旧蔵洋書を捜し出して図書館ロビーに20冊ほど展示したときに、長く図書館に勤務した者の役目として、学内の華族会館旧蔵洋書を調査してリストにまとめようと決意した。展示を見て下さった轡田収学習院大学名誉教授が、それなら日本語で表示された『華族会館寄贈図書目録』とリンクさせた洋書目録を作るようにと勧めてくださった。その課題に取り組み、このたび仮目録をまとめることができた。

現在学習院大学図書館は、戦前に収集した洋書の目録の整備を進めている。華族会館寄贈図書についても遠からず規則に則った書誌データがネット上に公開される見込みである。そこで詳細な目録はそちらに委ねることとして、作成した目録は簡略な内容にとどめた。ただし『華族会館寄贈図書目録』の典拠になったと考えられる共著者、改訂者、編者、出版社、出版地などは目録に含めるようにした。

今回は図書館員として、もっぱら図書の表紙から表題紙までを調査して目録を作成した。今後表題紙に続く本文の研究がなされるときにこの目録が活用されれば幸甚である。

最後に、目録の作成に協力して下さった学習院大学図書館館長、次長、課長をはじめ図書館員

の皆様へ感謝申し上げます。なお作成した目録は資料の管理体制の整備後に公開される予定。(図書館担当部署課長談)

凡例

引用文は原則として、仮名遣いは原文のまま、片仮名は平仮名に、旧字体・異字体は新字体に改め、適宜句読点を加えた。

注

- 1) 拙稿「学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵書について—忘れられた華族会館寄贈図書—」『人文』8号(平成22年)149-184頁(以下「前稿」と表示)参照。『華族会館寄贈図書目録』は学習院大学図書館に保管されている(未公開)。
- 2) 霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』(全2巻、霞会館、昭和61年)以下『華族会館誌』と略記。
- 3) 英仏独の順番から明治12年当時の日本ではドイツよりフランスの影響の方が強かったことが窺える。明治9年発行の東京書籍館の洋書目録(注4参照)も、English books, French books, German booksの順になっている。なお、明治37年ごろに学習院図書館において原簿が整備された際には、英独仏の順で蔵書が登録されている。
- 4) 明治16年、一橋大学の前身「商法講習所」が東京府から農商務省に移管された際の東京府からの引継原書の一覧38タイトル249冊/鋪においても、「フォーセット 経済書 2冊」のように、著者名は片仮名で、書名は日本語で表記されている(東京都編『商法講習所』〈東京都、昭和35年〉166-168頁)。また、図録『慶應義塾創立150年記念未来をひらく福澤論吉展』(慶應義塾、2009年)105頁にも、「『クアッケンボス氏 合衆国歴史』1冊 1870年」が展示資料として記載されていることから、慶應義塾も明治初期には原書を日本語で表示していたと考えられる。その一方で、官立の東京開成学校、東京大学、東京書籍館はそれぞれ明治8年、10年、9年に、以下のような欧文の蔵書目録を発行していた。『東京開成学校文庫書目 英書之部』—*A classified list of the English books in the Tokio-Kaisei-Gakko*. Tokio: 8th year of Meiji. 1875. 『東京大学法理文学部図書館英書目録』—*Catalogue of the English books in the Library of the Departments of Law, Science, and Literature, Tokio Daigaku*. 二千五百三十七年(明治十年)九月調査9th month, 2537. (10th year of Meiji). 『東京大学法理文学部図書館仏書目録』—*Catalogue des livres (sic) français à la Bibliothèque des départements du droit, des sciences et des lettres de Tokio Daigaku*. 二千五百三十七年(明治十年)九月調査9ieme mois, 2537. (10ieme année du Meiji). 『東京大学法理文学部図書館独逸書目録』—*Katalog der deutschen Bücher in der Bibliothek der Abtheilung von Rechtswissenschaft, Naturwissenschaften und Literatur. Tokio Daigaku*. 二千五百三十七年(明治十年)九月調査 Der 9te Monat 2537 (Das 10te Jahr von Meiji (sic)) (以上4点は高野彰監修・編集『明治初期東京大学図書館蔵書目録第1巻』〈ゆまに書房、平成15年〉所収)、*A Classified catalogue of the books in the English, French and German languages of the Tokio Shoseki-kwan or Tokio Library*. Tokio, Published for distribution by the Library 1876.
- 5) 所在を確認した華族会館旧蔵洋書のなかの2件については該当する書誌が『華族会館寄贈図書目録』に見当たらない。目録作成時に所定の位置に図書がなかったために目録から漏れたものと考えられる(リスト3の最後の2件参照)。
- 6) 華族会館が明治9年10月に所蔵していた蔵書の数(洋書1,686冊)に近い数字である(『華族会館誌』上巻189頁)。注17参照。

- 7) 洋書は登録番号5,030番まで。実際には、調査を進める過程で当初登録対象外であった資料が後に新しい登録番号を付与された事例や、一度処分された資料に後に改めて登録番号を付与して登録しなおされた事例が確認され、登録番号は学習院が資料を入手した時期の決め手とは言い切れないことが判明した。
- 8) この試みは、後にリンク版目録を作成する際に役に立った。
- 9) 華族会館の蔵書印の詳細は「学習院大学所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 付図 華族会館の蔵書印」(学習院大学文学部「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」作業委員会編『学習院大学所蔵京都学習院旧蔵書目録・華族会館旧蔵和漢図書目録・立花種恭・種忠旧蔵書目録・乃木文庫目録・福羽美静文庫目録』〈学習院大学、2005年〉所収、83頁)参照。
- 10) 『華族会館誌』上巻105-114頁参照。
- 11) その他に墨書はされていないが「会館勉学所」と押印された資料を1冊確認した。
- 12) 『華族会館誌』上巻91頁参照。なお、徳川宗家から華族会館へ図書と現金が寄贈されたのはその前日の明治8年7月10日であった。
- 13) Molesworth はホップス著作集の編集者。
- 14) 明治24年25年には欧文による英書目録が作成されている。注26参照。
- 15) なかでも、瑞穂屋が明治8年3月15日に海舟の所へ持参した「書目」との関連が考えられる。注28参照。
- 16) 『華族会館誌』上巻90、114頁。明治9年1月5日の華族会館開館式には司計局長として祝辞を述べている(『華族会館誌』上巻120-121頁)。
- 17) 華族会館が明治9年10月に所蔵していた洋書は1,686冊である(『華族会館誌』上巻189頁)が、明治10年に学習院が華族会館から寄贈された洋書は1,614冊である(『学習院第一年報』46頁)。華族会館が学習院構内(千代田区神田錦町)に仮の居を構えていた明治11年8月22日以降(15年9月17日まで)(霞会館編『華族会館の百年』〈霞会館、昭和50年〉298-299頁)に、残りの洋書も寄贈したうえで学習院の図書館を利用した可能性が高いと考えられる。
- 18) 「聖上…」という文言のあるものの割合が多いように感じられたため、再度該当資料を調査して枚数を確認した。
- 19) 『華族会館誌』上巻98-100頁参照。
- 20) ホップスの著作が東京書籍館、東京開成学校、東京大学の蔵書目録(注4参照)や葵文庫(注39参照)に記載されていないことを根拠に、明治初期の日本では華族会館のみが著作集を所蔵していた可能性が高いと判断する。なお、高橋真司『ホップズ哲学と近代日本』(未来社、1991年)には、「日本人としてホップズの哲学に言及した最初の一群は「明六社」に関係した人々であった」(91頁)が、「日本人としてホップズの書物を読んだ最初の一人に城泉太郎という人物がある」(91頁)として、「明治初年福沢諭吉の慶応義塾にホップズの著作が存在し、そこでホップズが読まれていた」(92頁)とある。そこで、『慶応義塾図書館史』(慶応義塾大学三田情報センター、昭和47年)に目をとおすと、明治初期の慶応義塾に教科書以外のものはまだ不十分で、明治6年に「義塾の文庫を調べしが、…思う程の政治書」はなかったという(33-34頁)。そのような状況で、明治初期の慶応義塾もホップスの著作集を揃いで所蔵していた可能性は低いと考えられる。
- 21) *The English cyclopaedia* の全巻(Geography編、Natural history編、Biography編、Arts and sciences編)を華族会館が所蔵。Biography編は東京書籍館の目録に、Arts and sciences編とGeography編は葵文庫(注39参照)にも記載がある。葵文庫の目録には「印記：開成所」とあるので、幕府

- の洋学研究機関である開成所（注 48 参照）が所蔵していたことになる。
- 22) 『尾崎三良自叙略伝』（全 3 冊。中央公論社、昭和 51-52 年）上巻 107-118 頁。
- 23) 和漢書目録には寄贈者名が（購入の場合は「購入」と）記されている（前稿 161-163 頁参照）。（和漢書目録の詳細な調査は未だ行われていない。）
- 24) 『勝海舟日記』（『勝海舟全集』〈全 21 巻+別巻〈2 巻〉、勁草書房、1972-1982 年。以下『勝海舟全集』と略記）第 18 巻-第 21 巻）。華族会館への書籍と現金の寄贈の経緯は明治 7 年 12 月 30 日から明治 9 年 8 月 29 日までの日記に記されている（第 19 巻 515 頁から第 20 巻 85 頁まで）。
- 25) 前稿 154 頁参照。
- 26) 明治 24 年 25 年に作成された学習院図書館の手書きの英書目録 (*Alphabetical catalogue of the English books in the Gakushuin-Library: 24th year of Meiji*、*Classified catalogue of the English books in the Gakushuin Library: 25th year of Meiji*) にはそれぞれ 500 冊、50 冊と記載されているので、明治 25 年にはまだ散逸していなかったことがわかる。
- 27) 明治 9 年 2 月 17 日に華族会館書籍局の件費を含めた経常予算月額は 47 円から増額されて 60 円となった（『華族会館誌』上巻 138 頁）。この限られた予算のなかから洋書を購入した可能性は低いと考えられる。
- 28) 『海舟日記』には、明治 8 年 3 月 10 日に瑞穂屋から洋書が届いた 5 日後の 15 日に「卯三郎、書目持参。」とある。この瑞穂屋が持参した目録が華族会館へ寄贈する洋書に添えられた可能性は高い。将来、その目録が徳川記念財団あるいは（華族会館を引継いだ）霞会館等から発見されれば、目録の記載内容と図書に書きこまれた書名や番号と照合することが可能になり、その図書が徳川宗家から華族会館へ寄贈されたものであることの裏付けを得ることができる。今後の調査に期待したい。（注 15 参照。）
- 29) 前稿参照。勝海舟「戊辰以来会計荒増」に華族会館への寄贈に関する内容が記載されている。「学集院御納本」等とあり、寄贈した洋書が華族会館から学習院に移った件を海舟が承知していたことを示している。
- 明治 7 年 4 月 9 日 四百円 瑞穂屋卯三郎。此分書籍にて返納、学集院御納本。
明治 7 年 4 月 23 日 七百円 瑞穂屋卯三郎。此分後書籍にて返上、学集院御納の分。
明治 8 年 1 月 19 日 二千円 洋書書籍千部
尾崎三郎談の末、溝口へ談、三位殿より華族書籍館相納むべき儀決定
明治八年並九年分入込。一月十九日。七月十日華族会館へ納む二千円、洋書千部（『勝海舟全集』第 21 巻 590 頁、594 頁）。
- 30) 『華族会館誌』上巻 91 頁、『勝海舟全集』第 20 巻 24 頁。なお「三位殿」とは徳川宗家第 16 代、当時従三位だった徳川家達のことである。
- 31) 「明六社の問題について、資金関係がどうであったか、これは重要な問題であるが、ハッキリしたことはわからない。森と木戸孝允との関係から、森、木戸を通して然るべき処から多少の運転資金が出たろうということも考えられないではないが、…。むしろそういうヒモは一切なかったと解するほうがよかろう。『明六雑誌』は報知社の発売であるから、恐らく発行一切はその方で引き受けたのであろう。そして、予想外に売れたから社の運営はそれで十分賄われた。ただ発足に当って多少の資金も要したはずであるが、…。同志が互いに一肌脱ぐ気持で手弁当で集まったのであろう」（大久保利謙『明六社』〈講談社 2007 年〉267 ページ）また、『明六雑誌』発行の資金関係についても具体的なことはわからない。森は…在米時代から書籍館設立の計画を持ち、そのためにアメリカから多くの書物を持ち帰ったことが木村匡著『森先生伝』77

～78ページにみえる。そこで明六社の結成についても何等かの資金を用意していたらということ推測されるので、この資金によって雑誌発刊と編集をし、印刷、および売捌きはこれを報知社に託したのではなかろうか」（大久保利謙『明六社考』〈立体社、昭和51年〉27ページ）等、これまで明六社の資金に関して種々な可能性が検討されているが、徳川宗家からの援助は想定されていなかったと考えられる。

- 32) 戸沢行夫『明六社の人びと』（築地書館、1991年）187頁。西周の日記に「明六社会、勝先生出席」とある（大久保利謙編『西周全集』〈宗高書房、1960-1981年〉第3巻、451頁）。西周が日記に記した明六会出席者名に「先生」と敬称を付しているのは勝海舟一人である。なお当日の海舟の日記には「上野精養軒行。明六社招待〔待〕。」とある。
- 33) 細谷新治『商業教育の曙』如水会学園史刊行委員会〔編〕（如水会、平成2-3年）上巻 142-150頁、木村匡『森先生伝』（金港堂書籍、明治32年）77-78頁、「森子爵の逸事」『日本』第14号（明治22年2月26日）。なお、森がアメリカから持ち帰った数千冊の蔵書に明六社のメンバーたちがどのように関わったかはまだ明らかになっていない。
- 34) 明治7年7月21日、同31日、9月6日、10月19日、11月13日、同16日。
- 35) この項は前稿の注31)をベースにして書き換えた。
- 36) 最年少の女子留学生津田梅子が「森の友人で弁務使館秘書でもあったチャールズ・ランマン宅に引き取られ、彼の懇切な指導のもとに、そこで十余年の歳月を送ったことはよく知られている」という（大塚孝明『森有礼』〈吉川弘文館、昭和61年〉151頁）。
- 37) 細谷・前掲書上巻144-145頁、阿波根直誠、H. Warrren Button「エルンスト・スタイガー宛森有礼書簡の発掘とその教育史的意義」『琉球大学教育学部紀要・第一部』26号（1983年）269-280頁。
- 38) 大久保利謙編『森有礼全集』（宣文堂書店、昭和47年）第3巻201頁。
- 39) 『江戸幕府旧蔵図書目録』（葵文庫目録）（静岡県立中央図書館、1970年）。葵文庫目録は現在ネット上で閲覧することができる（静岡県立中央図書館→デジタル・ライブラリー→葵文庫）。[<http://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/index.html>]（2011年7月7日閲覧）。
- 40) 『明六雑誌』には何点かの翻訳が含まれている。中村正直による論説「西学一斑」は *Encyclopaedia Britannica*, 8th ed. の「第1巻所掲 Dissertation First, Chap. I, Chap. II—Section I に依拠したものであるが、中村自身の観点で整理し、自らの解説・見解を加えている」（山室真一・中野日徹校注『明六雑誌』全3巻〈岩波書店、1999-2009年〉上巻 341頁）。箕作麟祥「人民の自由と土地の氣候と互に相関するの論」は「モンテスキュー…の『法の精神』（*De l'esprit des lois*, Geneva, 1748）第3部第17編第1-4章の英語版 *Spirit of Laws* よりの抄訳」（前掲『明六雑誌』上巻141頁）で、本文の最後に「右、仏国大学士「モンテスキュー」所著のスピリット、ラフ、ロウスより抄訳す」とある（同146頁）。箕作麟祥「開化の進むは政府に因らず人民の衆論に因るの説バックル氏の英国開化史より抄訳」は *History of Civilization in England*, London, 1857 & 1861 の「第5章 Influence of government on the progress of society の抄訳」（前掲『明六雑誌』上巻250頁）という。森有礼「宗教」は「スイスの国際法学者ヴァッテルの『国際法』（*Vattel, Droit des gens*, Neuchatel, 1758）の英語版 *Law of Nations* からの抄訳」（前掲『明六雑誌』上巻220頁）で、「万国公法の内、宗教を論ずる章（撮要）」（同221頁）とある。
- 一方で、森有礼旧蔵書が中心を占めていたという東京書籍館の蔵書目録にはこれらの洋書、*Encyclopaedia Britannica*. 8th ed. (2セット)、モンテスキューの（フランス語版選集と）英語版全集、バックルの *History of Civilization in England* が記載されている。ベンサムやミルの著作も含ま

れる。ヴァッテルの *Droit des gens* も記載されている（ただし抄訳に使用されたという英語版の記載はない）。

この2点を考え合わせると、国内に洋書が少なかった当時、森有礼がアメリカから持ち帰った洋書を明六社社員たちが『明六雑誌』に寄稿する論文の執筆や発表された論文の考証のために参照した可能性が高いといえるであろう。

- 41) Smiles, Samuel, *Self-help, with illustrations of character and conduct* を訳したもの。
- 42) この中の Goethe 全集には Y. Okada の署名があるところから、徳川宗家からの寄贈書ではないと考えられる。
- 43) 石井民司『中村正直伝』（『自叙 千字文／中村正直伝』〈大空社、昭和62年〉所収）82頁。
- 44) 高橋昌郎『中村敬字』新装版第2刷（吉川弘文館、平成10年）263頁。
- 45) 澤護「清水卯三郎—1867年パリ万国博をめぐる—」（『千葉敬愛経済大学研究論集』第19号〈1981年〉506頁）、白山映子「清水卯三郎の政治観—『当世言逆論 政体篇』を素材として」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』49巻〈2009年〉340頁）によって広告の存在を知った。なお、広告の最後に「右の外稽古本算書とも到来仕候間御披露申上候」とあり、瑞穂屋が数学などの教科書類を多く輸入していたことが窺われる。
- 46) その他広告には以下の27点が記載されている（括弧内は該当すると思われる著者名と原書名）。
 - タニール万国史 (Daniel, Jacques Louis, *Abrégé chronologique de l'histoire universelle*)
 - クールセ、コムタピリチイ (Courcelle-Seneuil, J. G., *Cours de comptabilité*)
 - ゴツシング窮理 (Gossin, H., *Notions préliminaires de physique*)
 - デヘレホン、舎密 (Dehérain, P. P., *Eléments de Chimie*)
 - セラバイル、動物学 (Gervais, Paul, *Eléments de zoologie, comprenant l'anatomie*)
 - マルシヤンド植物学 (Marchand, Léon, *Eléments de botanique*)
 - ロウリン、地質学 (Raulin, V., *Eléments de géologie*)
 - ドラハウス、□物学 (Delafosse, Gabriel, *Minéralogie* [?])
 - バルロウ、モラルプラチック (Barrau, Theod.-H., *Livre de morale pratique*)
 - ブエイ、サインス、アルト (Bouillet, Marie Nicolas, *Dictionnaire universel des sciences, des lettres et des arts*)
 - デホウドン、ヂクテイ (Defodon, Charles, *Cours de dictées, convenant à toutes les méthodes d'enseignement grammatical...*)
 - ジュリイン、ヂクテイ (Jullien, B., *Nouvelles dictées d'orthographe, ou, Recueil de devoirs dictés*)
 - フエデロン、テレマツク (Fénelon, François de Salignac de La Mothe-, *Aventures de Télémaque*)
 - リット、アルチマテク (Ritt, Georges, *Nouvelle arithmétique des écoles primaires*)
 - ウエルニール、ジオメイトリ〔該当書（候補）不明〕
 - ベヅーチ、トリゴノメイトリ (Bezodis, A., *Notions élémentaires de trigonometrie rectiligne*)
 - ペーアン、シミイ、インヂユストロイ (Payen, Anselme, *Précis de chimie industrielle*)
 - ドラハウス、ヒストワール、ナチユー ル (Delafosse, Gabriel, *Précis élémentaire d'histoire naturelle*)
 - オルレントルフ、仏英英仏 (Ollendorff, H. G., *New method of learning French*)
 - アン、ミルリオン、ド、フエイ (Un million de faits)
 - ラブレイ学術字書 (Laboulaye, Ch., *Dictionnaire des arts et manufactures et de l'agriculture*)
 - ザオルデンイ、ヒロソヒイ (Jourdain, Charles Marie Gabriel Brechillet, *Notions de philosophie*)

リット、アルジブラ (Ritt, Georges, *Problèmes d'algèbre et exercices de calcul algébriques*)

マスカルド、メカニク (Mascart, Eleuthère Elie Nicolas, *Éléments de mécanique*)

ブーテット、シミイ (Boutet de Monvel, B., *Notions de chimie*)

リッテイ薬剤字書 (Littré, Emile, *Dictionnaire de médecine, de chirurgie, de pharmacie, de l'art vétérinaire, ...*)

ヒロンナラシオン (Filon, Auguste, *Nouvelles narrations françaises*)

- 47) 1850年以降1875年以前に出版されたものという条件を付して国立国会図書館等の蔵書目録を検索して、該当すると思われる原書(候補)を選出した。
- 48) Montesquieuの*De l'esprit des lois*は英文庫にも記載されている(AF131)。その備考欄に「印記：開成所」とある(開成所は蕃書調所を拡充して文久3年(1863)に設置された幕府の洋学研究機関)(注39参照)。
- 49) 注40参照。
- 50) 明治8年7月10日に徳川宗家から2000円の寄附を受けて、華族会館は秋月種樹書籍監長の1ヶ月弱の在任期間に多数の図書を購入している(前稿の注46参照)。モンテスキューやルソーの著作がもし必要であれば、そのとき購入することもできたはずである。『華族会館寄贈図書目録』にモンテスキューやルソーの著作が記載されていないことから、秋月たちにとっても購入の対象外であったと考えられる。
- 51) 明治6年11月10日の海舟の日記に「米博士モルレー来訪。米国悻、世話いたし呉れ候人物、厚く礼申し述ぶ。杉浦同伴なり」とある。『高橋是清自伝』によれば、この日に通訳を務めたのは高橋是清であった。「その後、モーレー博士は勝先生に会いに行かれたであろうが、私は勝さんとの通訳だけは一切お断りをした。多分畠山義成君が行ったであろう」と自伝のなかで語っている(『高橋是清自伝』〈中央公論新社、1976年〉上 147頁)ように、その後は畠山義成・別名杉浦弘蔵がモルレーの通訳を務めたと考えられる。
- 52) 後藤純郎「学監モルレー雇用の経緯(II)」日本大学教育学会『教育学雑誌』第20号(1986年)7頁。
- 53) 畠山は、静岡学問所から東京開成学校に転じた理化学教師クラークとも親しかった(E.W.クラーク著 飯田宏記『日本滞在記』〈講談社、昭和42年〉129-131、159-166、222頁)。クラークは中村正直とも親しく、日本を離れる際には中村を伴って暇乞いに海舟邸を訪れたことが海舟の日記に記されている(明治8年3月6日)。このような海舟の幅広い交友関係が華族会館へ寄贈する洋書を選択する際にも生きてであろう。
- 54) 国立国会図書館支部上野図書館『上野図書館八十年略史』(上野図書館、1953年。以下『上野図書館八十年略史』と略記)1-27頁。
- 55) 文部省編『日本教育史略』(明治10年)50頁。モルレーによる原文は以下のとおり。“From the time of the recent transformation of the Government, the collection of books has become necessary for the use of the departments and the institutions of learning.” (*Outline history of Japanese education: prepared for the Philadelphia International Exhibition, 1876, by the Japanese Department of Education.* 〈New York, 1876〉p.34.)
- 56) 小林花子「明治初期上野図書館における目録編纂史稿(上)」『書誌学』復刊新巻号(昭和40年)84頁。
- 57) 『上野図書館八十年略史』22頁。
- 58) 細谷・前掲書上巻149頁。典拠となった*Public libraries in the United States of America*の前書きの

部分を以下に引用する。モルレーからの報告として、洋書 6,000 冊の核をなす部分 (nucleus) は森有礼から購入したと記されている。“the free public library recently established at Tokio, in Japan, deserves to be mentioned.

For the following brief account of this library we are indebted to the kindness of our countryman, Hon. David Murray, Ph. D., LL. D., superintendent of educational affairs in the department of education of the empire of Japan :

…It is a public library, open to all persons, native or foreign, who may desire to consult it.

…It was founded by the Mombusho (department of education) and opened to the public in 1875. The nucleus of the collection of foreign books was the private library purchased from Hon. Mori-Arinori, formerly the representative of Japan in the United States. …

I estimate the foreign collection now to contain, say, 6,000 volumes, and the Japanese and Chinese, say, 4,000 volumes.” (*Public libraries in the United States of America: their history, condition and management: special report.* Department of the Interior, Bureau of Education 〈Washington, 1876〉 p. xxxiv.)

59) 明治 8 年 12 月現在の東京書籍館の蔵書数は、和漢書 26,443 冊、洋書 6,379 冊合計 32,822 冊である (小林・前掲書 85 頁)。モルレーの上記情報には和漢書が 12 月には 26,443 冊に増加したことが反映されていないことになる。

60) *A Classified catalogue of the books in the English, French and German languages of the Tokio Shoseki-kwan or Tokio Library.* Tokio, Published for distribution by the Library, 1876. (注 4 参照。)

61) トーマス・レイク・ハリス (Harris, Thomas Lake) はアメリカの神秘宗教家で、森はそのコロニーで 1867 年から 1 年近く生活した。ローレンス・オリファント (Oliphant, Laurence) は森や畠山たち薩摩留学生にハリスを紹介したイギリスの外交官。チャールス・ランマン (Lanman, Charles) は明治 3 年から 4 年にかけて森有礼の私設秘書を務めた。(大塚孝明『森有礼』〈吉川弘文館 昭和 61 年〉参照)。

著作例 : Harris, Thomas Lake, *Arcana of Christianity.*

Harris, Thomas Lake, *Herald of light*, a monthly journal of the Lord's new church. May 1857-Apr. 1858, & Nov. 1859-Apr. 1860.

Oliphant, Laurence, *Piccadilly*; a fragment of contemporary biography.

Lanman, Charles, *Dictionary of the United States Congress.*

Lanman, Charles, *Japanese in America.*

Lanman, Charles, *Red book of Michigan*; a civil, military and biographical history.

62) 13 タイトルの東京書籍館洋書目録 (注 60 参照) 記載頁は以下のとおり。

著者、書名 (国立国会図書館の請求記号) (東京書籍館洋書目録の掲載頁)

American Bible Society, *Catalogue of books contained in the library of the American Bible Society*, … (27-146) (29 頁)

Blackstone, William, Sir, *Commentaries on the laws of England*. … (80-178) (10 頁)

Carey, H. C., *The unity of law*; … (70-32) (21 頁)

Carpenter, Mary, *Reformatory prison discipline, as developed by the Rt. Hon. Sir Walter Crofton, in the Irish convict prisons.* (75-113) (21 頁)

Clarke, Mary Cowden, ed., *Shakespeare's works*, … (24-36) (84 頁)

Duane, J. C., capt., *Manual for engineer troops.* (27-76) (68 頁)

Gifford, S. N. & Wm. S. Robinson, eds., *Commonwealth of Massachusetts.* Manual for the use of the

general court. (60-184) (24 頁)

Great trans-continental tourist's guide...from the Atlantic to the Pacific Ocean. (60-187) (97 頁)

Harris, T. L., Rev., *The herald of light: a monthly journal*, vol. 4, [no. 1-6: 1859. 11-1860. 4] (62-51)
(6 頁)

Huxley, Thomas Henty, *Lay sermons, addresses and reviews.* (63-26) (71 頁)

Moon, G. Washington, *The dean's English; ...* (24-89) (82 頁)

Taylor, Bayard, comp. & arranged, *Japan, in our day.* (A-73) (98 頁)

Verdi, Tullio Suzzara, *Maternity.* (31-32) (28 頁)

63) 引用した中林の論文では、この13冊を明治22年8月28日に東京図書館が保管を委託された「故森子爵所蔵」の和漢洋書の一部としている。

64) Bacon と Goethe の著作集は華族会館旧蔵書にも含まれている。

65) 東京書籍館は明治9年6月、和漢書、新刊書(1)、洋書の蔵書目録を刊行した。(「新刊書(1)」に含まれていない5門(歴史)と6門(辞典類)については引き続き出版する計画があったのであろう。)蔵書目録は国内各機関に送付され、同年アメリカのフィラデルフィアで開催された博覧会にも出品された。翌年初めには個人にも販売されたという(小林・前掲書 87-93頁、小林花子「明治初期上野図書館における目録編纂史稿〈下〉」『書誌学』復刊新3号〈昭和41年〉56-62頁)。なお、「1876, Oct. 14. Gift of the Tokio Library, Tokio, Japan」と書き込みのあるHarvard大学所蔵の当該洋書目録が電子化されて現在ネット上に公開されている。
[<http://www.archive.org/details/aclassifiedcata00librgoog>] (2011年6月8日閲覧)。

66) 目録の概要を把握するために数えたものであるが、冊数の数え方などによって多少の誤差はあると考えている。

67) 筆者が森有礼旧蔵書と推定する245件597冊の内訳は、歴史地理書が67件209冊、語学書が33件85冊、社会科学書が49件84冊、自然科学書が43件76冊、産業書が27件37冊、総記が3件33冊、文学書が5件32冊、哲学書が10件29冊、宗教書が3件6冊、芸術書が5件6冊である。(そのなかで華族会館・学習院に所蔵があり、東京書籍館に所蔵がなかった)168件371冊の内訳は、歴史地理書が47件132冊、自然科学書が31件60冊、社会科学書が31件57冊、語学書が21件52冊、産業書が25件35冊、哲学書が4件22冊、宗教書が3件6冊、芸術書が5件6冊、文学書が1件1冊である。

68) 『華族会館誌』上巻24頁。

69) 明治8年発行の蔵書目録『東京開成学校文庫書目英書之部』*A classified list of the English books in the Tokio-Kaisei-Gakko* (Tokio 8th year of Meiji 1875)に記載された件数(=おおよそタイトル数)は857件である。主題によって分野をおおまかに分類するとその内訳は総記が55件、哲学宗教が37件、社会科学が195件、語学が37件、自然科学が195件、産業工業が143件、芸術が18件、文学が54件、地理歴史が123件となる。そのうち歴史は73件である。モルレーは「此大学校中に書籍館あり教科書並に教師生徒の参考に備ふる書籍を蓄ふ」と述べていて(前掲『日本教育史略』45頁)(原文:“The university has a library of books, chiefly text-books and books of reference, for the use of professors and students”〈前掲 *Outline history of Japanese education*, p.31))、華族会館旧蔵洋書とは趣が異なることが窺われる。

参考文献

華族会館・華族会館旧蔵書関連

霞会館華族資料調査委員会編 『華族会館誌』（霞会館、1986年）

秋月種樹著 『華族会館創設事略』（河鱈実文、1889年）

拙稿「学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵書について—忘れられた華族会館寄贈図書—」『人文』
8号（2009年）149-184頁

坂田充「学習院大学所蔵高松松平家旧蔵書の概要とその伝来経緯：華族会館旧蔵書研究の一環として」『人文』6号（2007年）293-330頁

坂田充「学習院大学図書館所蔵華族会館旧蔵和漢書目録 解説」『学習院大学所蔵京都学習院
旧蔵書目録・華族会館旧蔵和漢図書目録・立花種恭・種忠旧蔵書目録・乃木文庫目録・
福羽美静文庫目録』（学習院大学、2005年）75-83頁

学習院関連

学習院百年史編纂委員会 『学習院百年史』（学習院、1980-1987年）

『學習院年報』（学習院、1877-1893年）

勝海舟関連

『勝海舟全集』18巻、19巻、20巻、21巻、別巻1、別巻2（勁草書房、1972-1982年）

『江戸東京博物館史料叢書 勝海舟関係資料 海舟日記』（3）（4）（5）（東京都、2005-2011年）

静岡学問所・葵文庫関連

静岡県立教育研修所編 『静岡県教育史』 通史篇上巻（静岡県教育史刊行会、1972年）

山下太郎 『明治の文明開化のさきがけ：静岡学問所と沼津兵学校の教授たち』（北樹出版、
1995年）

森有礼・明六社・商法講習所関連

大久保利謙編 『森有礼全集』（宣文堂書店、1972年）

大塚孝明 『森有礼』（吉川弘文館、1986年）

中林隆明 「森有礼旧蔵の洋書について」『参考書誌研究』第38号（1990年）50-52頁

山室信一 中野日徹校注 『明六雑誌』（岩波書店、1999-2009年）

大久保利謙 『明六社』（講談社、2007年）

戸沢行夫 『明六社の人びと』（築地書館、1991年）

細谷新治 『商業教育の曙』 如水会学園史刊行委員会〔編〕（如水会、1990-1991年）

田中昭徳 「森有礼とわが国近代商業教育の創成」『商学討究』25巻1/2号（1974年）89-118
頁

東京都編 『商法講習所』（東京都、1960年）

東京書籍館関連

国立国会図書館支部上野図書館 『上野図書館八十年略史』（上野図書館、1953年）

小林花子 「明治初期上野図書館における目録編纂史稿」（上）『書誌学』復刊新壱号（1965
年）79-93頁

小林花子 「明治初期上野図書館における目録編纂史稿」（下）『書誌学』復刊新3号（1966
年）56-87頁

後藤純郎 「東京書籍館の創立一人事とその特色—」『現代の図書館』13巻2号（1975年）
68-82頁

後藤純郎 「学監モルレー雇用の経緯（Ⅰ）」『教育学雑誌』第19号（1985年）18-30頁

後藤純郎 「学監モルレー雇用の経緯（Ⅱ）」『教育学雑誌』第20号（1986年）1-15頁

文部省編 『日本教育史略』（文部省、1877年）

An Outline history of Japanese education: prepared for the Philadelphia International Exhibition, 1876, by the Japanese Department of Education. (New York, 1876)

その他

『尾崎三良自叙略伝』 (中央公論社、1976-1977年)

長井五郎著 『焰の人・しみづうさぶらうの生涯—自伝“わかよのき 上” 解題—』 (浦和さきたま出版会、1984年)

石井民司 『中村正直伝』 (『自叙 千字文／中村正直伝』〈大空社、1987年〉所収)

高橋昌郎 『中村敬宇』 新装版 (吉川弘文館、1988年)

サミュエル・スマイルズ著 中村正直訳 『西国立志編』 (講談社、1981年)

平川祐弘著 『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク：中村正直と『西国立志編』』 (名古屋大学出版会、2006年)

蔵書目録等

『明治十二年十月調査会館贈寄学習院英書目録』『明治十二年十月調査会館贈寄学習院仏独書目録』・明治十二年十月『華族会館寄贈図書目録』学習院図書課 (学習院大学図書館所蔵。未公開)

『江戸幕府旧蔵図書目録』(葵文庫目録) (静岡県立図書館、1970年)

高野彰監修・編集 『明治初期東京大学図書館蔵書目録 第1巻』 (ゆまに書房、2003年)

A Classified Catalogue of the Books in the English, French and German Languages of the Tokio Shoseki-kwan or Tokio Library. (Tokio Shoseki-kwan, 1876)

Catalogue of European books in the Gakushuin Library. (Gakushuin, 1926)

ENGLISH SUMMARY

Books donated by Kazoku Kaikan to Gakushuin in 1877

HIROSE Atsuko

Kazoku Kaikan, the Peer's Club established in 1874 by peers, former feudal lords and high court nobles, planned to have its library, and collected books.

In 1877 Kazoku Kaikan founded the school named Gakushuin for the children of its members and transferred most of its book collections, 9,159 Japanese and Chinese books and 1,614 Western books to the library of the school, and became the patron of the library.

This transfer and the history of individual book became traceable by the recent discovery of the catalogue, prepared in 1879 and written in Japanese under the title of *Kazoku Kaikan Kizo-tosho Mokuroku*, of the transferred books, within the Gakushuin University Library.

The author found out 836 Western books bearing the ownership stamps of the Kazoku Kaikan in the Gakushuin University Library collection, by investigating the books published before 1877, and accepted by Gakushuin Library before 1897. These books were published in the United States of America, Great Britain, France, Germany, etc., and turned out to be a leading collection to promote modernization of Japan in early Meiji Era.

Most of the literatures were contributed by the Tokugawa Shogunal Household by the arrangement of KATSU Kaishu.

The story about the Japanese and Chinese books donated by the Tokugawa Shogunal Household was described before (No. 8 of this journal).

Key Words: Kazoku Kaikan (Peer's Club), Gakushuin Library, KATSU Kaishu, Tokugawa Shogunal Household, Meirokusha.